エロゲヒロインに転生したけど、隠しヒロインなら大丈夫だよね。

季高

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

エロゲ世界のヒロインに転生したら、主人公くんとのずっこんばっこんを警戒せざるを得ないわけだけど、隠しヒロインならそうそうそういう展開にはならないよね！

――なんでヒロインたちがヤンデレになって主人公くんじゃなくてこっちに執着してるの？

目次

そのいち　1
そのに　11
そのさん　19
そのよん　28
そのご　36
そのろく　48
そのなな　57
そのはち　66
そのきゅう　75
そのじゅう　86
そのじゅういち　95
そのじゅうに　104
そのじゅうさん　111
そのじゅうよん　118

そのいち

白き月夜が血に染まる。
ああ口惜しやと憎悪を叫ぶ。
一度還りて地獄に逢えば、
二度は還らず地獄に叫ぶ。
されど悪鬼はびこること無かれ、天魔、滴り落ちる血を拭うもの。
月が真紅に落ちることなかれ、妖魔、人の世の混沌を担うもの。
それら互いに剣を握りて首を狩る。
それら互いに牙を研ぎ、覇を唱えんと欲す。
故に天剣。
故に妖牙。
夜の世界に、秩序の裏を駆ける者たちが、今宵もまた激突する。
はて、はて、はて。
今宵の天剣妖牙は如何に、如何に、如何に――――

◇

『天剣妖牙』。
かつてとある新規ブランドの一作目として発売されたそのエロゲーは、萌えと燃え――そもそも萌えはもはや死語な気もするが――を兼ね備えたハイブリッドノベルゲームとして世に送り出された。
一作目にして、荒削りながらもとことん熱い展開は、多くのファンを生み出し、特定の界隈ではこれを知らないものはオタクにあらずというほどの盛り上がりをみせた名作だ。
舞台は現代、古くは二千年も前から人々は妖怪、もしくは怪異と呼ばれるような異形の存在と戦ってきた。これら妖怪を人々は妖牙と呼び、これらを討つ退治屋を、人は天剣と呼んだ。
時代は移り変わり、怪異が空想のものとされるようになった現代では、それを知るものはそう多くない。夜の世界を舞台に、天剣は人々にその存在が明るみに出ないよう、日々尽力しているのだ。

そんな世界観で、中心人物となるのは一人の少年である。この少年、元天剣の生まれなのだが、落ちこぼれの烙印を押され今は普通の男子学生としての日々を送っている。

ちょっと内気ではあるが、優しく芯の通った少年だ。

そんな少年が、ふとしたキッカケから妖牙に襲われ、それをかつての幼馴染であった少女に助けられるところから物語は始まる。

このストーリー、王道直球ど真ん中、山あり谷ありムフフあり。青春熱血入り混じり、手に汗握って息子も握る。そんな素敵な展開が、俺は大好きだ。

具体的には、当時大学生で、一人暮らし始めたて、一国一城の主となった俺は当然エロゲに手を出した。パッケージを買ってドンと飾りたかったのである。そして見つけたのがこの『天剣妖牙』、偶然ティザーＰＶを見た時にピンと来て、予約までして待ち望んで、発売日当日にゲットしたのだ。

結果――

――発売から一ヶ月はバグでろくにプレイできませんでした。

それはもうすごい勢いで炎上し、あわや回収騒動かとまで行ったそれは、なんとかお出しされた修正パッチをあててプレイできるようになったところ、評価が一変。

ゲーム画面をまるごとバグで殴りつけてくるような粗削りさは、シナリオにすら言えた。というか誤字脱字がめちゃくちゃ多くて、ろくにチェックできていないのだなと解って涙が出た。

だが、そんな弱点を補って余りあるほどに、魅力的な部分は魅力的だったために、むしろバグで知名度を集めた結果、口コミで評判が広がり、当時としても破格のセールを残したのだ。

さて、なんでこんな話をするかと言えば、俺はその『天剣妖牙』の世界に転生してしまったのである。社畜オブ社畜と化した俺はおそらく過労死か何かで一生を終え、気がついたらこの世界にいた。

この世界が『天剣妖牙』であることはすぐに分かった。なにせ俺は――『天剣妖牙』の登場人物になっていたのだから。

ラプラス、という少女がいる。

美少女だ。無口系というか、そもそも言葉がしゃべれないタイプのキャラで、神秘的な銀髪のロリ系美少女である。そう、美少女である。

ＴＳ転生である。あるべきものが無い時代。なんてことだ……！

しかもやっかいな点は二つある。そもそも美少女に俺が入って何の得があるというのか。新しく生えた美少女ならいい、ＴＳ転生を夢見る男は人類の約五割という俺の卒論によれば、ＴＳ転生は決して忌避すべきことではない。

だが、原作に存在する美少女に転生するということは、美少女が一人減ってしまうということだ。なんという莫大な喪失か。しかも、これが一方的に、有無を言わせず起きてしまうわけだから、俺の罪悪感はマッハを越えて時間をも突き破る。

……正直、未だに折り合いはついていないが、しかしもうすでに長い時間を「ラプラス」として過ごした俺は、それを受け入れなくてはならない立場にある。

もしも、ラプラスが戻ってきた時のために、できる限り本来のラプラスと変わらない生き方を、彼女に恥じない道を選べればといったところだ。

そしてもう一つ――こっちは今現在進行系で俺を悩ませる大問題。

ラプラスはヒロインなのだ。そう、エロゲのヒロイン、主人公とドッキングゴーしてオストゥーメスするラブなガールなのである。

嫌だよ男とまぐわいたくない。女の子を愛でていたい！

幸いこのゲームは純愛ゲー、ユニってるコーンどももにっこりなラブラブピュアっピュアな男と女のシーソーゲームなのである。まぁやるのはギッコンバッタンではなくギシギシアンアンなんだけど。

だから主人公以外とヤっちゃうことはない。

がしかし、そもそもからして、俺は主人公とくっつきたくない。だって他のヒロインに申し訳ないから。俺のような異物の混じった存在ではなく、普通に可愛らしい、そして優しい彼女と主人公はイチャコラしてほしいのである。

だってヒロイン、皆いい子なんだもの！　とってもとても尊いんだもの！

しかし、なんだかんだ言ったものの、俺はヒロインではあるが、メインヒロインではない。というか、サブヒロインですらない、隠しヒロインなのだ。

メインヒロインとのルートをクリアして解放されるグランドルート。そしてそのグランドルートをクリアした後に開放されるのが俺……というか「ラプラス」との隠しルートなのである。

このルート、非常に特殊な構成をしており、メインルートからは絶対に到達することのできないＩＦルートとなっている。だから、そうそう俺が主人公とラブをどうこうする間柄にはならないわけだ。

ホッと一安心。

事ここに至るまで、色々と悩んだ。身の振り方だとか、もっと事態に介入するべきではないのか、とか。回避できる不幸は回避するべきではないのか、とか。

中には実行に移したものもある。本編開始に向けて準備していることもある。ラプラスのレベリングなどは最もたるものだろう。グランドルートではこの『天剣妖牙』最強の敵を討伐しなくてはならない。本編では余りある幸運の末に勝ち取った勝利だ。そもそもグランドルートに入れるかすらも解らず、入ったところで勝てるかもわからない。だからこそ、「ラプラス」は強くなくてはいけないのだ。

そうやって自分を高めながら、俺はその時を待った。

そう、本編開始の時を。

――ここでぶっちゃけよう。俺はこの時をずっと待ちわびていた。『天剣妖牙』は俺の人生の中でも最も大きい楔の一つ。その世界に転生し、間近であの熱い物語を体験できるなら、俺はもう満足だ。

偶然手に入れられた人生、全てこの本編を堪能するために使ってもいいのではないか。

そう考えて、俺はこれまで頑張ってきた。それが、今。

俺の目の前で、結実しようとしていた――――

◇

――夜の路地裏で、俺は姿を全力で隠しながら、彼がやってくるのを待っていた。少しだけ俺が「ラプラス」になれて幸運だったのは、「ラプラス」が隠密を得意とする能力を持っていたことだろう。

だからこうして、俺はひっそりと潜伏し、状況を観察することができる。

そう、ゲームの名場面を間近で堪能できるのだ！

残念ながら映像化がされていない『天剣妖牙』は、昔ながらの紙芝居ノベルゲー、エフェクトもそこまで凝ったものではなく、情景は文章と想像に任せるほかはない。

だから、生で見ることのできるゲーム本編は、それはもう俺を最高潮へと至らせるには十分だった。

ゲームのオープニング、といってもここに至るまで色々と日常シーンが挟まるわけだが、その目的地として、主人公は夜に妖牙に襲われることとなる。

正確には襲われていた少女を助け、逃げるのだ。

この少女はヒロインの一人で、主人公の同級生、妖牙の事を何も知らない一般人だ。

主人公は元天剣、つまり妖牙の事をよく知っている。そうなると、説明のために主人公に質問を投げかける役割が必要で、このヒロインを通して、プレイヤーは『天剣妖牙』の世界を知っていくことになるのだ。

そうして二人でこの路地裏に逃げ込んでくるのだが、ここで問題発生、本来ならば行き止まりではないはずの路地裏が、色々あって封鎖されてしまっているのである。

結果袋小路に飛び込むことになる二人、しかしそこに割って入る物が居た。

このゲームのメインヒロインにして主人公の幼馴染。

メインヒロインという立場ながら、色々と美味しい立ち位置故に人気投票ではヒロイン勢でトップの位置にいる名実ともに一番人気の中核とも言えるヒロインと、ここで再会するのだ。

再会、といってもメインヒロインちゃんと主人公くんは同じ学校に

通っているので、決して顔を合わせないわけではないのだけど。
まぁ、夜の世界での再会。という意味では間違っていない。
かくして始まる妖牙との戦い、しかしこの妖牙、やたら強い。これにはもちろん理由があるのだが、メインヒロインちゃんはそれはもう苦戦する。後ろには守らなくてはならない人もいるのだから、当然だ。
だが、そこに待ったをかけるのは主人公。助けた一般人ちゃんの機転をヒントに、メインヒロインちゃんを助け、最後には二人で同時に攻撃を叩き込んで敵を撃破。
熱い逆転勝利である。
序盤においては特に人気のあるシーンで、俺もこのシーンは大好きだ。主人公の葛藤、メインヒロインちゃんの頑張り、そして決着のカタルシス。
どれをとっても完璧と言う他無い。あえていうならパーフェクトだ。
俺はずっと、このシーンを生で見ることを待ちわびていた。
それがようやく、今この瞬間、目の前で見ることができる。
ああ本当にながかった。ラプラスとして、彼女がしてきたことをなんとかかんとかこなしつつ、色々と考えて原作の過去にも多少の手を加え、黒幕を倒せるようにしながらこの瞬間を待った。
それが、今――――

――足音がした。

――来た！
興奮とともに、俺は主人公くんたちがやってくるのを待つ。
今頃彼らは必死に妖牙から逃げているところだろう。そのチェイスもまた白熱するのだが、やはり本番はメインヒロインちゃんが現れてからだ。
というか、一応主人公なのだから、あのくらいのチェイスは乗り越えてもらわないと困る。というかまぁ、ここまでくれば乗り越えたよ

うなものなのだけど。
さて、ここで俺が気がつくべきだったことは一つ。
足音が一つしかしないことだった。でも、気がつけなかった。なぜかって興奮で脳内がやばいことになってたから。
さながら延期に延期を重ねたエロゲの発売日が明日に迫った夜のベッド。
不安と期待が綯い交ぜになったあの感覚を思い出していた。
だから、気が付かなかった。
妖牙に追われているのが、主人公くん一人だったということに。
――あれ？
そして、疑問に思った直後。
「――なんでこんな時に限って工事なんかしてるんだよ！」
叫ぶ主人公くんの後ろに、妖牙が迫っている。
危ない、危ない、危ない。流石に割って入るべきか？　いや、メインヒロインちゃんは必ず来てくれるはずだ。っていうか一般人ちゃんどうしたの!?
混乱するなか、後ずさる主人公くんと、それに迫る妖牙。
絶体絶命の中――――
一撃で妖牙が真っ二つになった。

「な――」
「……へ？」
思わず声が漏れてしまった。小声だから、きっと聞こえては居ないとおもうけれど、しかし。なぜか妖牙は一撃で死んだ。
そんなことありえるはずはないのに。
いや、あり得た。ありえてしまった。
原作とは違う光景。一般人ちゃんがいないくらいなら、まぁ理解できる。けれど、一撃で妖牙が死ぬはずはない。この妖牙、特別性なのだから。
しかし――

「なに、が――」
周囲を見渡す主人公くん。
そんな彼に――
「あは、お久しぶりですね――ソラくん♥」
少女が、ゆっくりと舞い降りた。
「ヒツ、ミ――――？」
『天剣妖牙』の主人公、天影（あまかげ）ソラ。そして、メインヒロイン。巫剣ヒツミが、ここに再会を果たす。しかし、現れたヒツミちゃんは、俺の知っているヒツミちゃんではなかった。
清楚が服を着て歩いているような、黒髪ポニテの可愛らしい少女。ちょっと胸がユニバースしていること以外はごくごく普通の彼女だが、今は。
そのユニバースがビッグバンしていた。ゲームにおける彼女の衣装は巫女服ベースのかっこよさと可愛らしさを併せ持った楚々としたもの。
だが、今の彼女は巫女服を魔改造してから悪魔に売り払い、転生の後に買い戻したような代物だ。
胸も、お尻も、脇も、おへそも、背中も、どこかしらがどこかの角度から見れば覗けてしまうようなスケベが人に擬態する能力を得たかの如き衣装。
浮かべる笑みも、柔らかいものではなく、獲物を捕食する肉食動物の舌なめずりだ。
そこに、俺の知っているヒツミちゃんはいなかった。
というか、これは――この衣装は知らないが、彼女がつけている冠には覚えがある。あれは、今の彼女は――
「それと――」
そして。
おかしくなってしまったドスケベ巫女は、その視線を。

「――――会いたかったですよ、ラプラスちゃん」
――隠れているはずの、俺に対して、向けていた。
「なっ――ラプラス……ラプラス先輩!?」
そして、主人公くんも、俺に気がついて、視線を向けた。
暗影から、俺は姿を顕にする。直後、ヒツミちゃんの頬が、喜悦に歪んだ。
これは、そうだ――間違いない。
巫剣ヒツミは、『天剣妖牙』のメインヒロインは今――――
「私、貴女にあいたくて、あいたくてぁいたくてあいたくて」
――闇落ちしていた。
「こんな姿に、なっちゃったんですよぉ♥」
◇
――世界は、俺の知らない形へ変化していた。
メインヒロイン、巫剣ヒツミは闇落ちし、本来ならば一人では倒せないはずの妖牙を一撃で屠ってみせた。それはゲームでの闇落ちの意味を知っている俺からすれば、どうしてこうなったとしか言いようのない代物で。
そして、どうしてそうなったのか、俺にはさっぱりわからないのだ。

ああ、もしコレが、ヒツミちゃんだけではなかったとしたら。

「――ふ、ふふふ。待っていろ、ラプラス。お前は、お前だけは、私が……殺す。お前を殺すのは、私じゃなければいけないんだ！」

――俺の知らないどこかで、少女が殺意と執着でもって闇へと叫ぶ。

「ああ、ラプラス様――今宵も我ら妖牙の一族が、平穏の元過ごせたこと、感謝致します」

――俺の知らないどこかで、少女が崇拝と思慕でもって祈りを捧げる。

「ラプラスお姉さま、ラプラスお姉さま、今日もお姉さまはエッチだよぉ、うふふ。うふふふふふふ――」

――俺の知らないどこかで、少女が性欲と恋慕でもって己の体を押し付ける。

彼女たちは、この世界、ゲーム『天剣妖牙』のヒロインで、世界を救うために戦わなくてはならない者たちのはずで。

しかし、

だが、しかし。

今、この世界は普通ではなかった。

少女たちは、主人公ではなく、俺に対して執着を抱く。

やっかいなことに、それは恋愛感情だけではない。彼女たちの執着は、つまるところ――

ラプラスという存在そのものが、彼女たちにとっての全てになっていたのだ。

そのに

巫剣ヒツミ。

この辺り一帯の天剣を統べる巫剣家の後継者。

つまりお嬢様というやつで、本人はどこかおっとりとした清楚なお姫様キャラといったところだ。誰に対しても優しく、男女問わず人気の学校のマドンナ。

幼い頃は落ちこぼれと言われ遠ざけられていた天影ソラとも仲良くしていた過去を持つ。

この思い出は、ヒツミの中でもとても大事なものになっており、彼女がいろいろな柵に縛られながらも、色々と頑張ってこれた原動力なのだ。

オルゴールのＢＧＭと、どこか郷愁の混じった回想シーンは、否応なく彼女の印象に直結する――そんなキャラクターである。

さて、彼女は『天剣妖牙』のメインヒロインであり、女性陣でもトップ人気を誇るキャラクターである。『天剣』の人気キャラといえば、ヒツミちゃんと黒幕、それから一応ラプラスの三人が代表的である。

ヒツミちゃんは全編においてカワイイを振りまくこと、他ヒロインのルートですらある事情から存在感を放ち続けること、なんだかんだ言ってこの作品の顔であることが人気の秘訣。

黒幕はいわゆるエロゲの敵が魅力的になる法則による人気、ラプラスは印象に残りすぎる隠しルートが原因だ。

そんなヒツミちゃんの魅力は、敗北者であることだ。

敗北者、首を傾げるかもしれないが、いわゆるラブコメにおける主人公のことが好きなのに、今の関係を壊したくなくて好きと言えなかったり、自分よりも他人を応援してしまうタイプのキャラのこと。

おっとりとした、優しい幼馴染。まさに敗北者の適正者というやつだ。幼馴染、というだけで加点が大きい。しかもここに巨乳とかつけちゃう。いや巨乳は普通に勝利者の証じゃね？

二次創作では敗北者キャラを擦られることの多いヒツミちゃん、横から掻っ攫われたり、そもそも蚊帳の外だったり。しかし、ヒツミ

ちゃんの場合は敗北者というだけでは終わらないのだ。
幼馴染、というのはとにかくラブコメにおいては非常に敗北しやすい属性である。そもそも勝ち確なら物語が始まる以前に勝っているし、そもそもラブというのは出会いから始まる事が多いのに、すでに出会っている。作劇の上で印象を残しにくい立ち位置なのだ。
しかし、幼馴染でも勝利者になれる立ち位置が存在する。かつては仲良かったが、何かしらの事情で疎遠になってしまった幼馴染、だ。
ヒツミちゃんというのは、この両方を満たす逸材なのである。様々な事情から疎遠になってはしまったが、同じ学校で顔を合わせていた関係。
疎遠になったのはお互いに原因はないので、学校では普通に言葉をかわすし、オープニングの戦闘ではほとんど蟠りなく連携ができている。
しかし、肝心なところは互いにすれ違ったままで、自分のルートではこれが取り沙汰される。
一度自分のターンに入ってしまえば、そういった過去のすれ違いや、ヒツミちゃんは思い込みが激しいので、それによるすれ違いも合わせて、色々と二人は甘酸っぱい青春を送る。
しかし、他人のターンでは、一気に優しい良い子として、目の前のラブにたいして引いてしまう特性が発揮されてしまういじらしさ。本当は主人公への愛情は人一倍のはずなのに、
なんと可愛らしいことだろう、俺も大好きだ。
俺が特に好きなのは、学校の大きなイベントである文化祭の最後、後夜祭の最中にこっそり二人で抜け出して、後夜祭で振る舞われるお菓子（主人公と二人で作った）をこっそりつまみ食いする。それが人生で初めての悪いことだと告白するシーン。
ほんのちょっとの卑しさと、その事を恥ずかしがりながらもとても楽しそうにしている彼女の笑みに俺はやられてしまったのだ。
だから、今――
――そんな彼女が悪に染まったような笑みを浮かべて、本来の彼女ならするはずもないえっっっっっ過ぎる衣装を纏った少女の登場に、

俺は――――

――ぶっちゃけ興奮してました。すけべ過ぎる……。

◇

「――ヒツミ、どうしちゃったんだよ！」

天影ソラは叫んでいた。現れて一刀のもとに様子のおかしい妖牙を斬り伏せて、ソラの印象にそぐわない様子の巫剣ヒツミ。

いくら疎遠になったと言っても、同じ学校に通う同級生、普段の彼女がこんなことをする人間でないことはソラも解っている。だから、ソラには困惑以外の感情がなかった。

第一――

「その冠、イザナミだろう。どうして巫剣の神宝を持ち出してるんだよ！」

神宝。

天剣が、妖牙の誰もが欲する、この世界における奇跡の象徴。もっとも知名度が高いのはあらゆる願いを叶える神器、ムラクモだが、イザナミも紛れもなく神宝の一つだ。

巫剣家が代々受け継ぎ、守ってきたそれを、彼女は持ち出している。

「あは♥」

その効果は、今の彼女を見れば明白だろう。

人格の変成、強大な力の付与、そして――呪いだ。今の彼女は、それらでおかしくなってしまっているのだろう。すでに天剣を離れて久しいソラでも、今のヒツミは呪いに侵されていることがよくわかった。

だから、

「――――ソラくんが悪いんですよ？」

そう言われて、ソラは困惑する他なかった。

同時に、
〝何故〟
声――ではない、思念が飛んできた。
見れば、銀髪の幼さが残る少女――ラプラスもまた、表情は一切動かないが、おそらく疑問をヒツミに投げかけていた。いや、おそらくもなにも、思念で何故と問われたのだから、疑問に思っていないわけないのだが。
「――もう、ラプラスちゃんまで、私、二人に迫られて困っちゃいます。どっちも大切な人ですけど、今は私の話を聞いてください、ね？」
「……」
大切な人。
――ヒツミとラプラス先輩の間で、接点などあっただろうか、ソラは天剣に関する薄れた知識でなんとか状況を把握しようとする。
「ソラくんだって、ラプラスちゃんのことは知ってますよね。学校の妖精さん、誰とも言葉を交わさず、常に一人でいる孤高の美少女。素敵ですよねぇ」
「それは――」
知っている。応える前に、
「そして、その真の顔はこの地に現れた悪魔。当然ソラくんもそれくらいは知ってると思いますが――」
続けざまに情報が飛んでくる。
ラプラス先輩が天剣妖牙の人間であることは、この辺りで活動する天剣の中では有名な話だ。ラプラスの悪魔、一種の神宝とも言われる彼女は、時折天剣にも、妖牙にも喧嘩を売って、死者こそ出さないものの両者の思惑を台無しにすることで知られている。
しかし、一つの勢力では挑んでも返り討ちに合う強さは、彼女を孤高の存在として君臨することを許していた。
そんなラプラスの悪魔――ラプラス先輩を、随分とヒツミは慕っているように思える。
〝疑問〟
そんなラプラスの最も特徴的な特性は、言葉を使えないというこ

と。
彼女は喋れないのだ。だが、一言だけなら思念を飛ばすことで会話が可能、だから彼女は要するに……
〝無知〟
〝貴方〟
〝自分〟
――思念を察するに、自分とヒツミに接点がない、ということを言いたいのだろう。
「あはっ、そりゃそうですよ、私が一方的に知ってるだけですもん。……それこそ、天剣じゃなくなったソラくんのことを、私が気にしてたみたいに」
「えっ――」
ソラは驚愕していた。
そんなこと、思っても見なかったのだ。ヒツミは自分のことなど気にせず、天剣として頑張っているだろう、と思っていたから。
自分のことなど、忘れたほうがいいと思っていたから。
そして、何故か――
――ここでラプラスも動揺していた。表情は一切動かないが、露骨に視線が泳いでいたが、しかし。向かい合うヒツミとソラはそれには気が付かなかった。
幸いなことに。
「――ラプラスちゃんは、孤独なんですよ。ずっと一人で、他に頼れる人はいない。そんな中、ずっと一人で頑張ってたんです！　だから！　ソラくんがそれを支えなきゃダメじゃないですか!!」
「なんでだよ!!」
本当に意味のわからない理論だった。
接点がない、ラプラスはヒツミにそう言った。だが、ソラにしてもそうだ。ソラとラプラスに接点などない、学校の目立たない一般男子と、高嶺の花のラプラスなど、接点があるはずもない。
だというのに、
「ソラくんが悪いんですよ!!　ラプラスちゃんの寂しさを埋めてあげ

ないから！」
　ヒツミはそう言ってはばからない。
　いよいよ持って彼女の意思が理解できない。そしてそれは、どうやらラプラスもまたそうだったようだ。
　〝何故〟
　先を求めるように、問いかける。
「ラプラスちゃんは幸せにならなきゃダメなんです！　ソラくんが！　幸せにして！　それなのに！　あんな!!」
「お、おいヒツミ!?」
「ああっ!!!」
　ヒツミは錯乱していた。
　何かを思い出したのか、思い出したくないことを想起したのか。慌ててソラは駆け寄ろうとするが、
「近づかないでください！　今の私は、ソラくんだって傷つけちゃうかもしれないいんです!!」
「ヒツミ……！」
　それはそうだろう、呪い塗れの神宝を身に着けて、暴走状態にある彼女の精神では、そもそも執着しているラプラスだって傷つけてしまうかもしれない。
　当のラプラスは、どこか困惑しながらも狼狽し、一歩、後ろに後ずさっているが。
「ラプラスちゃん！　幸せになってください、幸せになりましょう、幸せって言えるようになりましょう！　世界って素敵ですよ、生きるって素晴らしいですよ、大切って心が暖かくなるんですよ！　だから、だからだからだからだから――――」
　まくしたてるヒツミは、その豊満な胸を揺らしながら、誘うようにラプラスへと近づいていく。
　ラプラスは、その様子に何かを察したのか、動かない表情を驚愕に染め上げて、一歩、一歩と後ずさる。そして、そして――

「だからラプラスちゃん、私と一緒に、空を飛びましょう？」

——ラプラスの瞳が、限界まで見開かれた。

「ラプ、ラス先輩……？」

異様だ。

あの鉄面皮のラプラスが、こうも感情を顕にするなど。しかし、ヒツミはそれに疑問をいだいていないように見える。そのまま、ゆっくりとラプラスを離れ、ふわりと浮き上がる。

「みてよ、見てくださいよふたりとも！　私、空を飛べるようになったんです！　この神宝すごいんですよ、これなら、ラプラス先輩に空をみせてあげられます！」

くるくると踊るように見せつけながら、少女は笑う。

笑って、笑って、笑って——

ラプラスは、

〝真逆〟

それを、

〝唯一（それだけ）〟

どこか、怒りに満ちた顔で、睨みつけた。

「あはっ♥」

——ヒツミは、そして。

「そうですよぉ。私は神宝を、空を飛ぶ手段として持ち出したんです。きっと、ラプラスちゃんが喜んでくれると思って！」

——直後。

ラプラスの拳と、ヒツミが手にしていた武器——錫杖が激突していた。

「――――あっは♥」

〝義憤〟

両者は、完全に互角であった。

ラプラスの拳が、ヒツミの錫杖が、カタカタと震えて衝撃を感じさせる。

「今、私の冠を壊そうとしましたね？　――心配してくれるんですか、えへへへ、ラプラスちゃん。嬉しいです」

〝当然〟

「咎めてくれるんですね、正そうとしてくれるんですね、間違っているって言ってくれるんですね。じゃあ――」

だから――

「――えへへへ、ラプラスちゃん。私――生まれて初めて、悪いこと、しちゃいました♥」

その一言は、ラプラスにとって、決定的に意思を固めさせるには十分で。

激戦の予感に、ソラはつばを飲むのだった。

そのさん

――ヒツミは大変なものを盗んでいきました。

原作の数々の名シーンです。

いやほんとにすげーいろいろぶっ壊されてるんだけどどうなってるの。具体的に言うと引っこ抜かれすぎて扶桑型戦艦みたいに成ってる。

こっから本編進行したら違法建築もいいところだよ！

まずヒツミちゃんがソラくんに明かした「自分がソラを気にしていた事実」。二人はいろいろな理由で勘違いによるすれ違いを起こしているのだが、これを解消するのは、二人の告白だ。

互いに互いのことを思い、そして思い合うことは、彼らのわだかまりをほぐし、かつての幼馴染としての関係を取り戻すに至る重要なシーンである。

それが、こんなところでポロっと漏れた。ソラくん超☆大困☆惑である。ちなみにヒツミちゃんはおでんの具だと大根が好き。

さて、それだけならば、今のヒツミちゃんは冷静ではないという証明になるだけだろう。端から見てもそれはそうなのだが、本人の口から絶対に語ろうとしなかったことを、こんなにもあっさりこぼすのだから。

ゲームの名シーンであるということは、それだけヒツミちゃんにとってそれが重要だということ。

だのに、こうして明かしたのだから、今のヒツミちゃんは普通ではない。イザナミを身にまとい、暴走しているのだから致し方ないことだが。

そしてこのイザナミ。これもまたこんなところでお出しされると、それはもうすごい原作ブレイクである。このアイテム、そもそもゲームではヒツミちゃんルートのラスボスが身につける装備なのである。

これを身に着けたラスボスは、一人で勢力を壊滅させることのできるラプラスより強い、この街の均衡を大きく脅かす存在だ。

そんなラスボス装備が、どういうわけかそれを打ち破る役目にある

はずのヒツミちゃんの装備になり、彼女をスーパードスケベバインバイーン巫女にクラスチェンジさせてしまった。
これではヒツミちゃんはエロミちゃんだ！
更に厄介なのはこの装備、グランドルートではある方法で使用される。エロミちゃんの暴走を止めるには、この冠を破壊しなければいけないのだが、破壊するとグランドルートで詰む。
色々頑張りはしたものの、ゲームのラプラスのスペックを超えることはできなかった俺としては、もしこの装備を破壊してしまえばグランドルートを勝ち抜けない。
自分をラプラスと信じてやまない元一般男性がイザナミで優勝できないのである。
最後に――そして、これは俺が原作ブレイクをカマし続けるエロミちゃんに待ったをかけた要因。
彼女は原作のラプラスルートを知っている。これは大変やばいことなのだ。ここでラプラスルートについて簡単に話をすると、これはグランドルートを攻略した後に現れるおまけのようなものである。
選択肢はほとんどなく一本道、最終的な結末も一つだけ。
であればこれが何かと言えば、簡単に言うとラプラスルートとはグランドルートの前日譚なのだ。グランドルートにはあるアイテムが突如としてソラくんのもとへ届けられることで始まるが、このルートを届けたのが何を隠そうラプラスルートのソラくんとラプラスなのである。
つまりなにかといえば、ラプラスルートでは二人は幸せになれないのである。
簡単な概要はこうだ、物語は本編開始の一年ほど前から始まる。というよりソラくんが学校に入学したときから始まる。本来の時間軸では一般男子学生として平凡な日常を送るソラくんだが、このルートでは入学当初、偶然ラプラスと知り合うのだ。
そして一年かけて関係を育み、そして本編開始直前、ある出来事が起こる。
詳細は省くが、結果として世界は滅んだ。

いやそれはもう派手に滅んだ。原因は二人にはないのだが、ちょっと面白いくらいに色んなものがかけちがった結果、滅んだ。
生き残ったのはソラくんとラプラスの二人だけ、ヒロインズも、敵キャラも、一般モブも全員死んだ。人類の総人口一人である。ラプラスは悪魔なのでカウントはソラくんだけだ。
結果、二人だけで生きることとなったソラくんとラプラスは、アダムとイブよろしく、もしくはリーヴとリーヴスラシルよろしく次代に何かを残そうとした。
ここで二人の関係は進展し、互いに絶対になくてはならない存在になるのである。そうして交わした約束が――
〝空を飛びたい〟。
二人だけの、世界に二人しかいない彼らの、秘密の約束。
それをヒツミちゃんは知ってしまったのだ。これは、まぁ決してありえない話ではない。相手が何の接点もない俺――ラプラスで、彼女がここまで影響を受けてしまうようなこともないだろう、という点を除けば。
ヒツミちゃん――巫剣の家系は、簡単に言うとそういうことができる家系である。映し身の巫女、なんてものがかつて巫剣家にはいたくらいだ。
簡単に言うと、平行世界の可能性を覗ける。
そしてヒツミちゃんは見たのだ、世界に二人だけになってしまったソラくんとラプラスの逢瀬を。そして、その結末を。
――このルートは、あくまでグランドルートの前日譚だ。前日譚というのは基本的に悲劇的な結末が待っている。どうせみんないなくなるし、一度も勝てなかったゲーマー夫婦は最後まで勝てないし、どれだけ倒しても兵士は湧いてくるのである。
であればラプラスたちの物語も、最後は死でもって締めくくられる。別の世界へ、世界が滅んだ原因に対抗するために、あるものを平行世界へ送り届けて、最後は二人で空を見上げて死んだ。
――きっと、ヒツミちゃんはその慟哭を聞いてしまったんだな。
だから、彼女の思いを俺は否定できない。どれだけグランドルート

で全てが救われるとしても、平行世界のラプラスとソラくんは救われない。
そのことに、彼女が思うところがあるのも解る。彼女の過去と境遇を考えれば、しょうがないことだ。
でも、だとしても――
俺は、だからと拳を握るのだ。
そうだ、だって――

――俺は、ソラに憧れた、あのラプラスではないのだから。

◇

天に、蒼の月。
血の気を失った死体のように、地に降り積もる雪のように。
月は空から見下ろしている。
激しい激突音とともに、二つの破壊が地を満たす。
着弾と、着地。
それは激戦だった。
「あは――っ」
〝――〟
夜のビル、その上に立つのは、色気を服にしてまとわりつかせただけの少女、ヒツミ。
それを見上げながら、クレーターになった地面の上に立つ人形少女、ラプラス。
沈黙が周囲を支配したかと思えば、足音が響く。ビルの影から、天影ソラが飛び出してきたのだ。
「ヒツミ！　ラプラス先輩！」
二人を慮っての叫びは、しかし。
〝不許〟
「近づくとあぶないよぉ、ソラくん」
拒絶で返された。

それに気圧されて、ソラは一歩後ずさる。
改めて、二人は向かい合った。
「あはぁ、やっぱ強いですねぇラプラスちゃん。どれだけ攻撃しても、こっちが押してるはずなのに、全然効いてないんですから」
〝――〟
――戦況は、ラプラスを地面に叩きつけたヒツミが有利、と言えるだろうがしかし、実際によく観察してみると、互いの状況はほとんど同じであることが解る。
ラプラスは無傷なのだ。思い切り地面に叩きつけられたにも関わらず、一切の怪我どころか、服がほつれた様子すらない。最初にソラとヒツミの前に現れたときと、全く変わらない状態でそこにいる。
ラプラスの服は学校指定のブレザーだ。まるで、今が日常と何ら変わらないとでも言わんばかりに、ラプラスは戦闘装束をまとわない。
天剣たちは、基本的に戦闘時、自身の能力を高めるために衣装をまとうが、ラプラスにはそれがないのだ。必要ないからである。
「さすが、可能性を否定するラプラスの悪魔、普通の攻撃じゃ、ダメージを受けた可能性を否定されて本体に届かない。本当に厄介な能力です」
〝不要〟
「あはは、無駄口はお好みじゃありませんか？　じゃあちょっと、大事なものをぶつけ合いましょうか」
――ラプラスの武器は拳と防御能力だ。
あらゆる可能性を超越する悪魔、ラプラスには通常の攻撃は通用しない。彼女に通せる攻撃は、すなわち彼女の知らない未知なる攻撃だけ。
一度でも彼女がその可能性を知ってしまえば、彼女はその可能性を否定する。
ラプラスが、どんな勢力とも渡り合える原動力だった。
そして、ヒツミはといえば、錫杖を使うのはこの状態になるまえからだ。あの錫杖は妖牙を切り裂くことができる光の刃を生み出せる。どちらかといえば、杖というよりも槍という使い方のほうが似合う代

物だ。
そこに高い身体能力――今はコレがイザナミを纏ったことで非常に強化されている――そして、
「お星さまのおしおきですっ！」
錫杖を振るうと、ヒツミは周囲に星を生み出した。星落とし、弧を描いて飛ぶ扱いやすい遠距離攻撃手段であった。これをラプラスは真っ向からかいくぐる。
〝無駄〟
「無駄じゃありませんよぉ」
当然攻撃はラプラスをすり抜ける、がしかしここでヒツミが狙いとするのは、星が光を帯びているということだ。簡単に言うと、目くらましになる。
〝――！〟
一瞬、驚愕。
目の前にいたはずのヒツミが、ラプラスの背後に回っていた。
直後、拳と錫杖が激突する。そこに迫る流れ星。ラプラスの弱点をうまく突く形だ。ラプラスの弱点は、威力の弱い不意打ちに対応できないことと、攻撃中は可能性を否定できないことだ。
後者は当然だ。可能性を否定したらラプラスの方から攻撃することもできなくなる。どうしようもなくなれば攻撃を中断するが、基本的に千日手は何の意味もない、故に攻撃中は可能性の否定は使えない。
前者はラプラスの能力の限界だ。ラプラスは基本的に攻撃的な可能性を否定しているが、あまりにも可能性を否定しすぎると自分の存在が否定されてしまう。
だから、
〝――っ！〟
こうして、あたっても致命傷にならない一撃、無視しても構わない一撃は不意打ちだと通してしまうのである。今回はそもそも可能性を否定できないというのもあるが。
とはいえラプラスは人ではない、耐久力はただの人間よりよっぽど

高いのだ。このくらいの流れ星、そう痛くはないのだが――数が多くて無視はできない。
一旦可能性を否定して、ラプラスが下がる。それをヒツミは追わなかったが、故にラプラスはすぐさま突っ込んできた。
――乱打が始まる。
ラプラスの弱点は二つある。可能性の否定を対処されること、そしてもう一つ。
「あはは、届かないよー！　全然届かないですよ！」
武器を持てないことだ。可能性を否定するラプラスは、拳しか武器にできない。常に徒手空拳、速度と威力はあるが、それでも下手に防御に回れると踏み込めない事が多い。
何より――
「――相変わらず、武道は稚拙ですね、ラプラスちゃん。見え見えなんですよ！」
ラプラスは攻撃が苦手だった。

びっくりするほど武道のセンスがないのである。そこまで前衛としての適性を持たないヒツミでもスペックさえ並んでしまえば悠々と対処してしまえるくらい。
なんなら、しばらく天剣から遠ざかっているソラでも何とかなるだろう。
それくらい、ラプラスはびっくりするほど下手くそだった。攻撃はどれも大ぶりで読みやすく、更には威力までスペックを活かしきれていないところがある。
どうしてここまでセンスがないのかは、天剣たちの長年の不思議なのだが、ともかくラプラスは弱かった。
しかし――
「――なら、これはどうですか？」
代わりに、というべきか。
ヒツミはあることを確認するようにラプラスに錫杖を向ける。直

後、
ラプラスが闇に飲み込まれた。
これは、イザナミの能力である。効果は腐食、飲み込んだものを腐らせる。天剣妖牙ならば対処は可能だが、一般人なら一瞬で腐った土に戻るだろう。
ラプラスを殺すつもりはない、しかし、これを使わないとヒツミはラプラスに打撃を与えられないのだ。ラプラスに通用するのは初見の攻撃だけなのだから。
果たして――

〝危険〟

――ラプラスは無傷だった。
初見の攻撃を受けたにも関わらず、それ以外の攻撃と同様に可能性を否定する。ありえないことだ。ラプラスの能力が解析されてからこれまで、天剣妖牙たちを悩ませてきたのがこの対処能力。
理論上、ラプラスは初見の攻撃を防げない。だから対処する時は可能な限り初見の攻撃、術式を用意するのが鉄板だ。だというのに、どういうわけかラプラスはその多くを無効化してしまう。
知っているはずがないにもかかわらず。
どこかちぐはぐだと、誰かが言った。
ラプラスは強い、だがどうしてか攻撃は初心者以下、どれだけ戦闘しても成長しない。代わりに、防御に対しては未だに有効打を与えられた勢力はいない。
それゆえに、ラプラスはとにかく只管に厄介だ。
だが、
「――でも、それも今日までです、ラプラスちゃん」
それも、今日終わる。
ヒツミはここでラプラスを解らせる。どちらが強者で、ラプラスは自分の救いを受け入れなくてはならないということを。
〝拒否〟

「――――あはっ♥」

しかしラプラスはそれを否定して、

――――激突は加速する。

そのよん

――ぶっちゃけ、ゲームのラプラスと俺だと多分俺は負けないが絶対に勝てない。

格闘センスのなさ、こればかりはどうしようもなかったのだ。ゲームの登場人物は当たり前のようにやっているが、実際にやってみるとそもそもスピードが通常時と違いすぎたり、誰からも学べないので独学にならざるを得なかったり、色々と障害が多かったのだ。

代わりと言っては何だが、格闘技術以外のスペックは本来のラプラスより高い。俺はラプラスの能力の由来だとか、来歴を全てしっているので、何も知らずに世界に放り出されたラプラスと比べれば、能力の引き出し方は段違いに上手いと言えるだろう。

ここらへん、ラプラスルートの終盤はラプラスが一人で戦う場面も多く、スペックをかなり引き出しているのだが、だいたいそのくらいの頃の能力だ。

ルートラスボスが身にまとう神宝を取り込んだヒツミちゃん相手でも、決して見劣りするものではない。

加えて俺はこの世界の大体の能力、及びその効果を知っている。少なくともゲームに登場する人物の技は全て理解しているので、初見殺しが通用しない。

かくしてここに、身体スペックは異常に高いのに実際に戦ってみると大して強くない代わりに、どんな攻撃も通用しないのでめちゃくちゃうざいラプラスちゃん（俺）は誕生したのである。

が、しかし。

同格相手の初めてのガチ戦闘、これはどうにも、キツイな！

「もぉ、そんなに逃げ回っても近づけないよ、ラプラスちゃーん」

ヒツミはかなり余裕の態度だ。実際これまで一度として攻撃を加えることができないのだから、当然といえば当然なのだが。

というよりも、この戦闘で非常に面倒なのは、俺に決定打がないということだ。

具体的に言うと全力のぐーぱんを打ち込んでも、ヒツミちゃんは一

撃じゃ倒せない。そしてダメージを受けたところでヒツミちゃんは遠距離からの引き撃ちが可能なので打開に繋がりにくい。
ヒツミちゃんの余裕は、こちらは絶対にヒツミちゃんを一撃で倒せないと彼女は解っているところから来ているのだ。
「でも、そうやって頑張るラプラスちゃん尊いですよぉ、もっともっとがんばってぇ」
――厄介オタクと化したヒツミちゃん。
愉悦混じった笑みは、まさしく淫魔とか、そういう単語がふさわしい。巫女って昔はエッチな職業でもあったんですよ、知ってました？
ともあれ、ドスケベみこみこ大権現と化したヒツミちゃんに隙はない。実力の殆どがイザナミの呪いに依存しているはずで、基本的な戦闘経験はゲームと何ら変わっていないにも関わらず、まったく踏み込ませてくれないのだ。
どれだけ戦闘が下手でも、生まれてからずっとレベリングと戦闘経験を積み重ねてきた俺は、たとえ同格だからってそうそう遅れをとることはない。
何なら時折、各ルートのラスボスにも喧嘩を売るが、そこそこ優勢に戦えている。
だが、どうしてかヒツミちゃんには踏み込めない。色々と理由はある気がするのだが、戦闘経験がどれだけあってもド下手くその域を出られない俺ではよくわからない。
強いて言うなら、なんかこう、近づきがたい。精神的に、踏み込み過ぎたら捕食される気がしてならない！
〝厄介〟
「――ンンンッ！　ラプラスちゃんが私に悪感情を向けてくれています！　私のことを厄介だと思ってくれています!!」
〝無敵〟
――これはダメなタイプのオタクだ。
エッチな配信者にパンツの色とか聞いて気持ち悪がられることで満足するタイプのオタクだ。ちなみに今日のラプラスのパンツは白。ネット通販で頼んだリボンとかあるやつだ。

女の子になったら、パンツの夢は……壊したくない！　あと結構こういうおしゃれって楽しい……（雌落ちフラグ）
「ラプラスちゃんが悪いんですよ！　そんなに凛々しい顔で、常に周りを振り回して、ついにはお父様まで！　ああ、なんて悪い子なんでしょう！」
――お父様。
ちょっと厄介な名前が出てきた。この地を守護する天剣の長、ヒツミの父で、ヒツミルートのラスボス。巫剣テンホウ。有無を言わせぬ役満ツモみたいなこの男、それはもう厄介なのである、相手にしたくない。
とはいえ、それはおそらく誤解だと思う。ヒツミちゃんがこうなっている以上、巫剣家で何かが起こっているのだろうが、そもそも俺と巫剣テンホウの面識はそうないわけで。
あるといえばあるけど、そもそも会話はしていない。
「まぁ、そういうところも私はカワイイとおもうんですけどね！
さぁラプラスちゃん、もっともっと行きますよ！」
――うわあああ弾幕が増えたー！
一気にやばくなる流れ星の群れに、俺は慌てて可能性を否定して飛び退く。もうなんというか、末恐ろしい。こちらもそうそう負けはしないが、決着がつかない。
このまま日の出まで耐えきっての時間切れが一番丸いのではないかというほどに、
いやしかし、こっちから喧嘩を売った手前、あのクソ呪いアイテム排除したいんだけど……無理かな？
というか、そもそもヒツミはこれでいいのだろうか。何のために俺の前に姿を表したのか知らないが、顔見せに来ただけとか？
この世界はよくある幹部が無駄に力を見せつけて顔見せだけして帰っていく展開が大好きなので――まぁ、正確にはいろいろな理由で撤退しなくてはならなくなるのだが――それもあり得るかもしれない。
だから、俺としてはこのまま無駄に戦って一度仕切り直しできたほ

うがありがたい。ちょっと色々ありすぎて、思考を冷却する時間がほしいのだ。

どっちにしろ、このまま時間が過ぎていくのはありがたい。下手に逃げるとそのあとどうなるか解ったものではないので、あくまで時間稼ぎに終止する感じで。

うまく、対処していくのが最善だろう。

だっていくらヒツミちゃんが強くなったと言っても、それはイザナミの力に依るもの、それではこちらをどうこうすることはできないし、どうこうできなければ夜明けになる。

夜明け、というのはこの世界においては非常に重要な要素だ。

基本的に天剣妖牙は夜にしか活動しない。夜のほうが強い力を使えるなど、様々な理由があるが、とにかく夜明けは刻限なのだ。

それまで、時間はおそらくあと数時間。まだまだ先は長いが、十分戦えている、問題なくヒツミちゃんを撤退させられる。

の、だが。

——ふと、疑問に思った。

なにか違和感はないか？　見落としていることはないか？　そしてそれは、もう手遅れだったりしないか？　たとえば——俺に干渉せずに俺をどうにかする方法はないか？

答えは——

——ある。

けど、それは、ヒツミちゃんには使えないはずだ。それこそ——

否。

——使える。

ヒツミちゃんが神宝を持ち出せたということは、それも使える。使えてもおかしくはない。そもそも、ヒツミちゃんはイザナミで強くなっているが、イザナミはヒツミちゃんの能力も向上させている。

先程増えた弾幕がまさしくそれだ。

だから、まずい。

そう、思ったときには遅かった。

「――――あーあ、気付かれちゃいました」

ヒツミちゃんは、そんな残念そうな物言いとは別に、勝利を確信した笑みでもって、俺を見下ろしていた。そして俺は、今――――

――空の上にいた。

俺の弱点というか、ラプラスの弱点は否定できない可能性があることだ。攻撃の際には可能性を否定できず、一定以上の可能性を否定できない。

そして、ある可能性をラプラスは絶対に否定できない。

それは視界である。視界は絶対になければ周囲を把握することができず、何が起きるかわからなくなる。だからつまり、

ラプラスは幻覚に弱い。

もちろんそこは対策がないわけではない。まずそもそもラプラスの肉体は様々な干渉に耐性。いわゆるボス耐性、状態異常耐性というやつだ。

だからどんな幻覚も、長時間かけ続けなければ効果は発揮しない。

だが、一度発揮してしまえば、幻覚から抜け出すことは難しい。ヒツミちゃんは時間を賭けて、ゆっくり幻覚を掛け続けていたのだろう。彼女の本当の目的は時間稼ぎだったのだ。

そして、結果それは成功した。まんまと彼女の策に引っかかってしまったのである。

ああクソ、この流れはゲームにもあったのに、ヒツミちゃんと結びつかなかった。使われたのがヒツミちゃんのルートじゃないからだ。

反省するが、しかしもはやここまで来てしまえばどうしようもない。

今、俺の目の前にいるのがヒツミちゃんであるか、その判別は俺にはつかない。下手に攻撃してなにかとんでもないものを壊してしま

う可能性もある。
〝不覚〟
だから、うなだれる他ないのだ。
「えへへ、捕まえましたよラプラスちゃん。ずっと、ずっとずっとずっとずっと、この時を待ち続けていたんです！　やっと、やっとやっと！　私のものになってくれましたね!!」
〝拒絶（なってない）〟
一応、強がりを言うものの、こういうのはああいった手合には興奮のスパイスにしかならないだろう。ああ、これが普通に愛されるだけならいっそ受け入れることもありなのだが。
――今のヒツミちゃんが何をするか俺にはわからない、ラプラスはどうなってしまうんだ!?
「よぉし、まずは――」
何故かそう言いながらヒツミちゃんは服を脱ぎ始めた。まってまって本当に何するつもり？　幻覚が発動してもここは天下の往来なのよ！　自分を大切にしなさいよ―！
〝疑問〟
「何をするって――決まってるじゃないですか。当然――」
いやだ、ちょっと聞きたいけど聞きたくない。俺はまだこう、人として終わりたくない――――！

その時だった。

俺の耳に、パトカーのサイレンが飛び込んできた。
「なっ――」
〝勝機！〟
今がチャンスだ。俺は即座に可能性を否定して姿を隠しながら飛び退く、めちゃくちゃに飛んで、どこに行くかもわかったものではないが、ここから離れてしまえば問題ない。
しかし、そうか。パトカーということは、警察に通報したのか。
「……余計なことしてくれますね!!」

それは、天剣妖牙たちにとって、禁じ手とされるものだ。
そもそも天剣は警察とつながりがある。だが、それは裏のもので、一般には知らされていない繋がりだ。だから警察を呼べば天剣が恐れる一般人に知られるという危険から天剣を散らすことができる。
あまりにも禁じ手すぎて、一度でも使った天剣は完全に天剣としての立場を追われることになるのだが、
やったのは――

「――あっちです、あっちで変な爆発音が！」

「――ソラくん！」
元天剣、一切何一つ問題のない立場だった。
ゲームにおいては、一般人ヒロインちゃんがやってみせたこの奇策、まさか主人公くんことソラくんがやってくれるとは思わなかった。
「――もう、台無しじゃないですかこんなの！　……ラプラスちゃん！」
逃げに入ったのか、声が遠ざかりながらヒツミちゃんは俺に声をかけてくる。
「それが空というやつです！　ラプラスちゃん、私は絶対に、貴方を空へ連れていきます！　私だけが、そうするんです!!」
だから、と――それ以上は聞こえなかった。

かくして、ここにゲーム本編で始まるはずだった戦闘は終わりを告げた。
とてつもない原作ブレイク、これからどうなってしまうのかという疑念、いろいろなものが入り混じりながらしかし、俺は――
――この幻覚、どうやって解除しよう。
とりあえず、当面の問題にとりかかるのだった。

なお、朝になったら自動で解除された。時間経過と朝になったことでの術の効果減少によって、なんとか耐性で弾けるまでに弱まった結果だろう。
よかった……口だけでなく眼も使えなくなったら本当に生活にこまるところだった。

◇

――――翌日。

「じゃあ、一緒に登校しましょう、ラプラスちゃん！　……あ、学校だとラプラス先輩って呼びますね♥」

俺の自宅に、ヒツミちゃんが凸してきた。
というか、呪いが感知できない。
あのヒツミちゃん。貴方もしかして――――イザナミを制御していらっしゃる？
「んー、やわらかいー。あ、おひさまが出てるうちは絶対に戦いません。私だって天剣の一員です、そこはわかってますから！」
なんて、思い切り抱きつかれながらヒツミちゃんは言う。
ああ、しかし、これは――――
――もしかして、夜のほうが色々と対処しやすいのではなかろうか。
そう、思わずにはいられないのであった。

そのご

――ここでラプラスワンポイントアドバイス。

もとい、ラプラスの日常生活に関わる話。ゲームにおけるラプラスは、学校では高嶺の花と言う感じの扱いを受けていた。

喋ることができず、それを苦にも思わない性格から周囲とは壁があったが、周囲からはいじめを受けるようなこともなく、むしろその姿をかっこいいと思われていたのだ。

この辺りはゲーム世界のご都合主義に感謝、というところだろうか。

そして、そんな高嶺の花ことラプラスの生活は、そもそも生活というものが存在していなかった。そもそもラプラスに食事と睡眠は必要ない、エロゲーなので性欲だけは何故か存在するが、それも他人よりは薄いくらいだ。

なので、ゲームのラプラスには家がなかった。夜は常に天剣妖牙と戦っているし、昼は学校にいればいい。休日は人の居ない山奥でずっと静止し続けていた。林の中にぽつんと立っているラプラスは神秘的を通り越してシュールの域に足を突っ込んでいたが。

しかし残念ながら俺はラプラスではなく前世の記憶があるラプラス（偽）いくら食事が必要ないと言っても、色々と食べたいものはあるし、娯楽だって触りたい。

とはいえラプラスにはラプラスのイメージが有る。幾らなんでも匿名掲示板に入り浸って一日を潰す非生産的オタクな生き方はするべきではないのだ。

アニメとかゲームはする――隠しルートではラプラスと仲良くなるためにソラがゲームを奨めてくるのだ――が、それ以上は突っ込まない程度に自制しつつ、俺はそこそこ文化的な生活を送っていた。

ちなみに資金は暴れている妖牙を討伐してそれを天剣の事務所に放置してその目の前に賽銭箱を置いたり、穏健派の妖牙を討伐しようとする天剣を止めて、帰り際に賽銭箱を置いたりして稼いだ。

世の中、金が誠意なんですよ。

さて、ラプラスのイメージはできる限り守りつつ、それでも文化的な生活を送るための必需品、端的に言えばそれはタブレット端末である。

筆談にも、ネットサーフィンにも、ゲームやアニメをするためにも必要なこれは、俺が生活を送る上で必要にかられて導入したアイテムだ。

何かしら誰かに用がある時はこれをつかってコミュニケーションを取る。多少は迷惑をかけてしまうが、そもそもラプラスは孤高な美少女なので、交流の機会は少ないから問題ない。

さて、それ以外の俺は、基本的にラプラスと同じように、他者とは交流を絶って、周囲から一目置かれつつも、どこか壁のある存在としてこの学校の有名人になる――はずだったのに。

どうしてだろう、本来のラプラスと違って、ラプラス（偽）は、やたらとお菓子だの美味しいものだのをプレゼントされるのである、主に同学年の女子たちに。

――最近は後輩まで、普通にお菓子をくれるようになったのだが。

これってもしかして、餌付けされていないだろうか？

中身はただのおっさん、いくら取り繕ってもラプラス（真）に勝てるはずもないのに、不思議である――――

〈〉

「はーい、ラプラス先輩飴ちゃんですよー」

ラプラスはちょっとだけ目を輝かせながらそれを直接口で受け取った。

「はーい、ラプラス先輩ジュースですよー」

ラプラスはそれを警戒しながら――先程直に飴を口の中に入れられたのに今更――受け取った。なお、特に確かめもせずに飲んだ。

「はーい、ラプラス先輩お弁当ですよー」

ラプラスはまっていましたとばかりにお弁当箱をあけた。
中身は――一言で言うとお子様ランチだった。ラプラスは抗議の意味を兼ねて、それを持ってきてくれた少女――巫剣ヒツミを威嚇した。
「はーい、ラプラス先輩お洋服をぬぎぬぎしましょうね――」
――そして油断したところを狙って、ついにヒツミは凶行に及んだ。
それまでの献身的な行動にすっかり油断していたラプラスは思い切り制服の一番上を脱がされて――そこではっと我に返ってヒツミを押しのけた。
『さすがにそれはダメです』
ばっとタブレットを取り出して筆談を開始。
ラプラスとヒツミは互いに向かい合いながら、ジリジリと位置を変えるのであった。
「むー、失敗しちゃいました。ラプラスちゃんいつもスキだらけだから、行けるとおもったのになー」
『私は隙だらけではありません』
そうやってタブレットを掲げながら、脱がされたブレザーを着直すラプラス。しかしどう考えてもラプラスは隙だらけだった。なにせこの状況でヒツミが飛びかかれば間違いなくもう一枚行けるのだから。
「んふふ♥」
――しかしヒツミはそれをしなかった。
理由は単純、一枚行けたとしてもそれでおしまいだから。そして――
「……あの、ふたりとも?」
ここにいるのが、ヒツミとラプラスだけではないからだ。
――天影ソラ。昨夜の事件の当事者が、ここには勢揃いしていた。
『はくじょう者』
恨みがましく、見ているだけでしかなかったソラにそんなことを返すラプラス、ソラははくじょうがひらがななことにツッコミたかった

が我慢した。
「んー、やっぱりラプラスちゃんはカワイイですねぇ。ほらソラくん、もうエッチな展開にはなりませんから気まずそうに距離を取らなくていいですよ」
「そういう展開にするつもりだった!?」
「あはー」
――ヒツミの感情が読めない。数年ぶりにこうして正面から会話をするが、ソラはヒツミのことが解らなくなっていた。それはまぁ、当時のヒツミ――というか、ほんのちょっと前のヒツミとすらキャラがぜんぜん違うのだから当然といえば当然なのだが。
「それで――ソラくんは何のご用？」
「……まずは、確認。ヒツミ、大丈夫なのか？」
『それは私も気になります』
――ヒツミの安全。
彼女は今、イザナミと一体化している。神宝イザナミ。死と腐敗を司る女神イザナミの力を内包した冠。これは身につけたものに莫大な力を与える代わりに、精神汚染と身体の腐敗という呪いを与える。
非常に、危険な代物だ。
とはいえ流石に身に着けて数日で体がくされ落ちることはないが。
「大丈夫ですよ？」
――そう言ってヒツミは、

ガバっと制服を開けて胸を晒した。

両手で抱えても溢れてしまうほどの豊満な胸が、セクシー極まりない黒下着によってつつまれ、ふわりと揺れる。
『やめなさい』
即座にラプラスがそれを抑えにかかる。当然ソラは視線を逸した。
――しかし、ラプラスはすぐに気がついた。少しの間ヒツミと格闘し、諦めてからマジマジと覗き込む。
『肌がキレイですね』

――ヒツミの肌に変化は何一つなかったのだ。
ラプラスの知識では――そして、ソラの知識に置いても、イザナミを身に着けたものは一日もすれば体の大半が腐り始める。だが、今のヒツミは何一つ変化がない。
「うん、どこも腐ってないよ。――身につけて解ったけど、女の子はイザナミの侵食が遅いみたい」
――伝承では、イザナミは身につけたものを朽ち果てさせるという。しかし、そもそも伝承に置いてイザナミを装備したのは全員が男だったのではないか。
そもそもイザナミというのは自身の肌が腐れ落ちたのを見てしまった夫、イザナギを呪ったという伝承がある女神だ。つまり何がいいたいか、
「……本来のイザナミは、女性が身につけるものだった？」
「巫剣家は女性が人柱になる習慣があるから、身につけることがなかったんじゃないかな」
ヒツミが再びブレザーを着直すと、ソラも視線を戻す。
ちょっと顔が赤かったが、残念ながらこの場にそれを指摘するものはいなかった。
「もっというと、特定個人に対して執着のある人が身につけると、イザナミはその人に適合するみたい」
『適合』
「うん、だから今の私は――イザナミになってるんだよ」
そうやって笑う彼女は、ソラの知るヒツミではなく――そして、〝ラプラス〟の知るヒツミでもなかった。精神汚染、というよりもそれは精神が混ざり合っているのだろう。
だからヒツミはヒツミの意識を保ちながら、イザナミとしての行動に躊躇いがない。
執着は間違いなくヒツミの本心だ。だが、それをさらけ出す行動に移させるのはイザナミの影響が強いのだろう。
『話はわかりました』
「うん、解ってくれて助かるよ。これを話しておかないと、ふたりとも

私のこと本気で心配しちゃうと思うから――私、こんなに元気なのにね？」
そうやって、ヒツミは立ち上がるとくるくると回った。――ミニスカートから、ちらりと黒のパンツが覗く。ソラはなんとか見ないようにしたが、ラプラスは思わず見入ってしまった。
――キレイだ、と。
本来ならヒツミにそれは似合わないと思うのに、どうしてか、今のヒツミにはこういう下着が相応しいと思ってしまうほどに。
「じゃあ、予め宣言させてもらうね？」
そう言って、数歩ヒツミは下がる。まるで、コレ以上の馴れ合いは不要だと言わんばかりに。
「ラプラスちゃん」
――その口元は笑っていた。

「――貴方には、幸せになってもらいます」

その目は、真剣そのものだった。
「私、巫剣ヒツミはラプラスちゃんの未来を見ました」
――沈黙。ラプラスもソラも、その宣言をただ黙って聞いていた。
ラプラスはそれに何を思うのだろう。ソラは、変わってしまった幼馴染に何を思うだろう。
「その未来では、ソラくんがラプラスちゃんの心を開いて、ラプラスちゃんは笑っていました。――ねぇラプラスちゃん。ラプラスちゃんって、笑えるの？」
――ラプラスは口元を引っ張って、笑みを作ってみせた。
答えはなかったが、返事は端的だった。
「でも、ラプラスちゃんって笑えるんだよ。ラプラスちゃんだって生きてるんだよ。でもさ、――ラプラスちゃんって、まるで自分が生きてないみたいに振る舞うよね？」
ソラには、その言葉の意味がわからなかった。
ラプラスを何も知らなかったからだ。

「まるで、自分は生きてちゃいけないみたいに、もっと別のふさわしい誰かがいる、――戦場のラプラスちゃんは、そんな生き方をしていました」
ラプラスは、その言葉の意味が嫌というほどわかった。
――口に出したことなど一度もなかったというのに、悟られてしまったことを反省した。
「私は――そんな人を知っています」
畳み掛けるように、ヒツミは言った。
「生きることを許されなかった人を知っています。生きることを望んでいながら死んでいった人を知っています！　――――残された人のことを、知っています！」
だから、
「それが私が貴方を救いたい理由です、ラプラスちゃん」
それは宣戦布告だった。
「――それとソラくん」
「……何？」
「後で社務所に来てくださいね？　ソラくんがやらかしてくれたアレ、こっっっってり社務所の人達が言いたいことがあるそうですので」
そこで話題がそれた。
ソラは――ラプラスに対する執着混じりの宣戦布告とはまた違う、心の底から怒りに満ちた笑みを正面から浴びた。
さもありなん。
――きっと、昨日の社務所は地獄だったはずだ。
ソラは、そこで奮闘しているだろう二人の女性を思い出し、頭を痛くする。
ソラのしたこと。警察を呼んだこと、これをうまく処理するために、社務所――天剣たちの戦いをサポートする裏方組織――は奮闘していたのだ。

これが何も知らない一般人ならともかく、完全に解ってやっている元天剣ともなれば、処理する人間には如何に事情があったといえど、許せるはずがないのだ。
「はい……」
『そもそもの原因はヒツミさんでは？』
――そして、この件に関しては完全部外者のラプラスは根本的な事を口にした。そもそもソラが行動を起こしたのはヒツミが暴走していたからだ。
それに巻き込まれただけのラプラスには、この事実を指摘する権利がある。
だが、
「え？　だって今、天剣の仕事はほとんど私が処理してるんだよ？　お父様があんなことになっちゃって、私が頑張ってるんだから、ちょっとのことくらい、目をつむってくれても許されるよ？」
――ヒツミは、ラプラスが聞き逃がせないことを言った。
「――テンホウ殿が？」
「うん――」
ソラが、そう問いかけて、ヒツミが答えようとした時。
ラプラスが詰め寄った。
『その話』
ぐいっと、
「う――」
『ちょっと詳しく』
ぐぐいっと、
「うう――」
『聞かせてもらえませんか』
上目遣いで、距離が近かった。
「うううう――――」
「あ、ちょっとラプラス先輩――」

まずい、とソラが思ったときには遅かった。

「辛抱たまらないよ――――!!」

ヒツミがラプラスに抱きついた。胸でラプラスの顔を押しつぶした。

「なんでそんな誘うことするんですかラプラスちゃん！　可愛すぎですか！　ラプラスちゃんは本当に隙だらけです！　どこで食べられちゃうかわかりませんよ！　あああもういい匂いすぎますーーーーーーーーーっ！」

すーはーすーはー。

すごい顔をしながら、ラプラスを全身でヒツミは堪能していた。ラプラスが挟まれて、その豊満な胸が強調された。

ラプラスはジタバタと両手を動かすが、これは逆効果だろう。ソラの眼から見ても、ラプラスのその行動は実にあざとかったのだ。

「ほんと、ラプラスちゃんって、どうして変なところであわてんぼさんなんですか？　おっちょこちょいなところもカワイイですけど、見てて心配になるんですよー！」

――――そう言われて、ラプラスは目を丸くした。

「ああ、よく聞くよね、ラプラス先輩がまたドジしてるって」

――――――――さらにラプラスは目を丸くした。

「んふふ、はやくラプラスちゃんを独り占めしたいなぁ。お家に持って帰って、いろんな事を……えへへへへへ」

「やめてあげてよ……」

「――お昼のうちは、しませんよ？」

ふと、ヒツミの声のトーンが少し変わった。

「これはソラくんにも伝えておきますが、天剣は巫剣の次期当主として、天剣の鉄則を破ることはありません。ですので、昼の間はこうして愛でるに留めます」

そう言って、ラプラスの頭をわしゃわしゃし始めるヒツミ、完全に猫か犬かの扱いを受け始めたラプラスはさらにジタバタともがく。

完全にタブレットへ触れられなくなっているので、その反応はまったく読み取れないが、間違いなく彼女の心は言っていた。
助けてくれ、と。
――ソラは見なかったことにした。
「ですが、夜は違います。私、巫剣ヒツミは天剣の主として、悪魔ラプラスの捕縛を命とします」
そして、そこからのヒツミの言葉も、否定できるものではなかった。
ラプラスの悪魔。
――目の前の少女は、ここ十数年、天剣妖牙たちを悩ませてきた存在だ。時には両者の戦いに割って入り悪とされる側を勝手に討伐、その討伐料をせびってきたり、時には特に理由もなく潜伏していた極悪妖牙を勝手に討伐して討伐料をせびってきたり、時には裏切り者の天剣を捕縛しては捕縛料をせびってきたり。
そんなはた迷惑な――はた迷惑なだけでしかないところがより一層やっかいな――悪魔は、しかしこれまでまったく捕縛、ないしは討伐の手立てがなかったのである。
それが、ヒツミが神宝イザナミを手中に収めたことで可能になった。であれば、ラプラスに対する処遇は捕縛以外にありえない。
「ただし、気をつけてください――私達天剣はあくまで捕縛を本命としますが、そうでない者も――――」
「――ヒツミ」
「……なんですか、ソラくん」
「ラプラス先輩、話聞けなくなってる」
すねた様子でソラを見たヒツミは、自分の胸に埋もれて動かなくなっているラプラスを見て、悲鳴を上げるのだった。

◇

――美少女のおっぱいに絞め殺されかけるというあまりにも幸運

な不幸を体験したラプラスは現在、一人で買い出しに出ていた。
そもそもラプラスは一人暮らしなので、自炊が必須。そろそろ時間は七時を回るところ、日はまだ落ちきっていないが、この時間は狙い目なのだ。
何がといえば、スーパーの半額セールである。
半額弁当バトラーと化したラプラス、今日の目当ての惣菜をもとめて、買い物バッグを片手にスーパーを目指していた。
さて、今の時間は七時、夕刻である。空は赤と青のコントラストが実にキレイだ。そして、日はギリギリ落ちていない。
あと数分で山の向こうに消えていくだろうか、といったところ。
この状況、天剣妖牙たちにとっては昼という扱いである。そして、数分もすれば太陽が見えなくなる、このタイミングを境に、天剣妖牙たちの夜が始まる――のであるが、しかし。
だからといって、まだ往来に人のいるこの時間帯を、天剣たちが戦場とすることはありえないことだった。故にラプラスも、何も気にせず外出していたのだが――

もし、ラプラスがヒツミの話を最後まで聞いていれば、少なくともこの時間帯に出かけることはなかっただろう。

道を一つ曲がったときのことだった。
不自然に人の気配が消えていることにラプラスは気がついた。
その正体にも、しかし。
――それよりも一撃は早かった。

「死ねぇぇぇぇぇ！　ラプラスの悪魔ぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

不意打ち。
ラプラスにとって最悪といってもいい弱点は、しかし。
ラプラスを、通り過ぎていった。
強すぎたのだ、一撃が。ラプラスのオート防御に引っかかってしま

うほどに。
「チッ――悪魔め、そうやってまた逃げるのか！」
そう言って、振り抜いた薙刀を構え直す少女が、目の前にいた。
青みがかった髪、武道着と呼ぶべき装束に身を包んだ、散切り頭のショートが特徴な、眼を見張るほどの美少女だった。
険しい瞳、殺意に満ちた顔。
――そこまでの行動で、そして、こんなギリギリの時間帯で襲撃を仕掛けてくること。どれをとっても、彼女はラプラスを殺すのだという意思に満ちていた。
ラプラスは困惑しながらも――しかし、覚悟はしていたのか、すぐに気を取り直し、拳を構えた。
買い物バッグ――１００円ショップのものなので、捨てても惜しくはない――を投げ捨て、臨戦態勢を取る。
「……ふん、やる気なようだな。だが、覚悟しろ」
そして、薙刀を構えた少女、
「――――この不凍義ミズキ、お前の首を、必ずや切り飛ばしてくれる！」
彼女こそ、ラプラスの中の人が知る、四人のヒロインが一人。
不凍義ミズキ。
ヒツミと同じ天剣であり――彼女のもうひとりの幼馴染、そんな少女が、今。
ラプラスに対して、殺意という極上の愛情でもって、己が刃を、突きつけていた。

そのろく

――なんとなくヒツミちゃんがああなったときから、俺はこうなるんじゃないかという気はしていた。

不凍義ミズキ、『天剣妖牙』四人のヒロインが一人、いわゆるツンデレというか、主人公に対してあたりが強い枠。

ゲームにおける主人公であるソラくんとの関係は、接点がないヒツミの幼馴染同士、だ。

面識はある。お互い、巫剣に使える天剣の一族であり、言ってしまえばソラとミズキは同僚だ。そして、才能に恵まれていたのがミズキであり、落ちこぼれと蔑まれたのがソラである。

ミズキはソラを軽蔑していた。能力がないのにヒツミの隣にいる人物、周りから蔑まれても声もあげず成果を出そうともしない臆病者。

――そんな奴が天剣の長であるヒツミと親しくすることが許せなかったのだ。

だから、ソラが天剣を追われた時、ミズキはとても喜ばしかった。

――ヒツミが悲しげに、ソラと遊んだ秘密基地で一人佇んでいるのを見るまでは。

さて、そんなわけでソラくんに対してとにかくあたりが強いミズキだが、実はゲーム開始時点ではそこまでソラに対してキツイことは言わなかったりする。

というのも、悲しげにしているヒツミを見た直後から、ミズキはソラと接触を持つようになった。追い出されたソラが更にひどい目にあっては、ヒツミが更に悲しむからだ。

天剣の次期当主として、追い出された天剣と交流を持つことのできないヒツミの代わりに、という意味もあった。

だがそれもあって、結果としてソラという人間の内面をしったミズキは、ソラの評価を多少改めていた。ゲーム開始時点でのミズキのソラへの評価は『生まれが悪かった』という評価だ。

ソラは決して無能な人間ではない、機転が利くし、知恵も回る。彼

の才能は裏方であれば発揮されていただろう。しかし、そうはならなかった。社務所の一族に生まれなかったからだ。
人には常に役割、役目というものがある。ヒツミが天剣の次期当主であるように、ミズキがそれを支える立場にあるように――だから、天剣という役目から降りた彼をことさら悪くいうのは、ミズキのほうが悪者になるし、公平ではない。
しかし――いろいろな理由で、ソラは天剣の世界に戻ってくる。
ミズキはコレに対して憤慨した。それもあって、ミズキの序盤の役割は『序盤の障害』である、オープニングが終わり、最初にソラくんたちと激突するのがミズキであった。
某変身ヒーローよろしく内輪もめ展開である。そうして最初に戦い、そして乗り越えた後に味方になる。それがミズキの役割だった。
かくして、ついたあだ名が野菜星の王子様。
他にも、色々とネタに事欠かない少女である。まず高身長貧乳であり、それを気にしている。というか作中の女性陣ではロリ枠にはいるラプラス以外だと一番小さい。
ヒツミの身長は普通だが、残りの二人は低身長で、ロリ巨乳とそこそこの大きさを揃えているので、必然的によくある貧乳煽りは全てミズキが受け持つことになった。
行動も天然なことが多く、ミズキは実はソラのことを陰日向から見守ってるつもりだったのだが、ソラにはバレバレだったりした。
他には、実はこのソラを監視するのを、ヒツミに伝えていなかった。コレが原因でひと悶着が起きたりするのだ。
そんなミズキを代表するのは、ルートに入ってからの彼女のデレかたである。
当然ながらツンデレ系のキャラなので、素直ではない、とにかく素直ではないが、非常にわかりやすい。口で文句を言いながら、ぶんぶんとフラれている尻尾が見えるのだ。
幻覚ではなく物理的に。
そして、もう一つ。彼女を語る上で欠かせない要素がある。ネタ的にも、キャラ的にも、彼女には端的に一言表現で表せる言葉があるの

だ。
それは、ミズキがヒツミとは幼馴染ではあるが、ソラとは接点がない。という事実に起因していた――

◇

拳が弾かれる。反撃の一撃を可能性の否定で透かし、更に踏み込むが殴りかかった勢いをそのまま投げ飛ばすのに使われた。なんとか空中で体制を立て直すが、そもそもミズキはラプラスの着地する場所に先回りしていた。
着地狩りも通過して着地したラプラス。しかしそこに足払いが飛んできた。
格闘素人のラプラスにはそれを防げない、あっという間に地面に叩きつけられてしまった。痛みはないが次に行動が移せない。
――眼の前に、ミズキの薙刀が突きつけられていた。
「――――弱い」
ミズキは端的に吐き捨てた。
ラプラスは表情を変えず、しかしまずいと言った様子でミズキを見る。手も足も出ていない、というのが現状のラプラスの状況だった。
――近接戦において、ミズキはゲーム開始時点でも全体の中では上位にはいる強さを誇る。
代わりにヒツミのような遠距離攻撃手段をもたず、搦め手にも弱い。だが、こうして正面からの殴り合いだと、いくらスピードが勝っていようと、ラプラスは容易に対処されてしまうのである。
「あまりにも、弱い。これが悪魔と呼ばれたラプラスの強さか？　バカにしているのなら――今すぐその首を差し出せ」
〝拒否〟
「だったら――」
ミズキは薙刀を振り上げ、ラプラスは何とか起き上がる。
「――悪魔としての強さを見せろ、ラプラス！」
振り下ろされたそれを、何とか身体スペックで躱すラプラス。再び

攻防が始まった。逃げ回りながら、ラプラスは思念で叫んだ。
〝何故！〟
「何故襲うか、だと？」
肯定として沈黙を返す。
「――そんなこともわからないのか？　この、悪魔め！　全てお前が悪いのではないか!!　お前さえ――お前さえいなければ!!」
わけがわからない、とラプラスはそれ以上の言葉なく距離を取る。
そのまま背を向けて走り出した、人目があって、戦いにくいのだ。もっと言えば、昼のことがあって、ラプラスはあまり人工物を破壊する戦闘がしたくない。
昼のこと――社務所がソラに激怒しているという話だ。
普段から社務所にいろいろなものを押し付けているラプラスは、ここで更に迷惑をかけたら心象がまた悪くなる。いくら天剣の一人に襲いかかられていると言っても、それを盾に暴れまわったら、向こうとしては下げたくない頭を下げなくてはならなくなる。
それを避ける程度の思いやりが、ラプラスにはあった。
――そういった絶妙に配慮しなくてはならないタイミングで配慮されるのが、社務所の人間的には怒るに怒れず複雑な気分にさせるのだが、それはまた別の話。
「はっ、逃げるだけでは何もできないぞ！」
〝心配――〟
ミズキの嘲るような叫び、そして、ラプラスはそこでようやく、
〝――無用〟
反撃の準備を整えた。
少女の体が宙を舞う。高らかに飛び上がり、数百メートルを一足で跳躍してみせた。空にラプラスの影が刻まれるが、しかしここまで来れば構わない。
――ラプラスがやってきたのは、街の外れにある森だった。
そこは、天剣妖牙の戦いの舞台にふさわしい場所である。妖の気配に満ちた山は、天剣と妖牙たちがそれぞれ施した隠遁の術式が施されている。

ここなら憂いなく、自分とミズキは戦えるというわけだ。
少し遅れて、ミズキがラプラスの目前に着地する。一度木の上に降り立ち、それから地面に着地した。一足でここまでやってこれない彼女は、木の上を飛び跳ねてショートカットしてきたのだろう。
「……ふん、ここなら私に勝てるとでも？　舐められたものだな」
〝誤解〟
舐めてなどいない。しかし――
〝無用〟
――このフィールドでは、ミズキは勝ち目などないのだ。
〝――必勝〟
ラプラスが、一気に飛び出した。
ミズキは油断なく構える。隙はない、ただラプラスが突っ込んだだけでは、間違いなく先ほどと同じように対処されるだろう。それまでに両者の格闘技術には隔絶した差があった。
だが――
直後、ミズキの周囲の地面がまとめてラプラスに薙ぎ払われた。
――そもそも、ラプラスは確かに格闘技術は毛ほどもない。だが、だとしたらもっと容易に対処されているはずだ。倒すことはできなくとも、相手にしないことは難しくはない。
ミズキがやってみせたように、殺さずに痛めつけるだけなら、何も問題はないのだ。
それでも、ラプラスがとにかくめちゃくちゃウザいと評されるのは、これが原因だ。
身体スペックが高すぎるのである。
故に、地面など容易に吹き飛ばせる。武芸者にとって足場は絶対になくてはならない武器である。踏み込めなければ力を籠められないし、足場があって、立っている場所が確かだから人は状況を認識できるのだ。
「――やはり、そう来たか！」

叫ぶ。
とはいえ、これはラプラスの戦い方を知っていれば、当然考慮しなくてはならない戦い方である。加えていえば、遠距離攻撃を有する者なら、対処は不可能ではない。
だが、それでは終わらない。
――あちこちに飛び散る土の塊、なんとか足場にすることが可能かもしれないそれ。この間を飛び乗って戦うことが、近距離攻撃手段しか持たない者の戦い方だろう。
ラプラスも、また――そうである、はずがない。
そう、ラプラスは――

この足場をすり抜けてくる。

「――っ！」
突進してきたラプラスを何とか薙刀で払う。
ミズキは顔をしかめた、わかってはいた。――これが本気のラプラス、可能性を否定するラプラスはこの足場を無視して透明化し移動できる。
相手にだけこの不利な足場を押し付けるのだ。やつにはそれが可能なだけの身体スペックがある。
そこからは、一方的だった。
ラプラスの三次元攻撃は絶え間なくミズキを襲う、ミズキはなんとかそれを読んで打ち払う他にない。ラプラスの一撃は苛烈極まる。この程度ならさばけるだろうと、一切遠慮なく致命とも言える攻撃を打ち込んでくるのだ。
実際、即死はない。だが、下手をすると放っておくと死ぬ程の重症を負わされることもある。流石にそうなったら、社務所まで郵送されるだろうが、つまるところそれは敗北だ。
故にラプラスは突きつける。
〝降参〟
負けを認めろ、と。

――それが、ミズキの逆鱗の触れるのだとしても。
このままでは、ミズキは自分に勝てないのだから、と。
「――そうやって」
だから、それはある意味挑発でもあった。いくらラプラスがたまにドジをするとしても、ここでドジをすることはない。
解った上で、ミズキを挑発し、そして。
「また、そうやって――私に何もさせないつもりかぁあああ!!」
叫び、激突。
ラプラスは――――
ミズキに、素手で受け止められていた。
〝――!〟
驚愕、即座に可能性を否定してその拘束を抜けだす。だが、この状況はあまりにも隙だらけだ。ミズキは即座に、片腕を払った。
薙刀ではなく、片腕を。
初見の一撃。本来のラプラスなら、これをまともに受けるはずだ。
――もちろん、このラプラスはそれを受け付けないのだが。
だが、ラプラスの狙い通り変化は、明白だった。
ラプラスの後方、散らばっていた土に、爪痕が残されたのである。
「ぐ、ぁあああああ! ラプラスぅうううう!」
そして、ミズキの姿は明白に変化していた。
ラプラスがその様子に、驚きつつも対処を考えていたその時。
――ミズキはラプラスの首を掴んでいた。
へし折るほど強く掴んではいない。だが、対処できない速度だった。不意打ちだったというのもあるが、ミズキはラプラスの認識を上回る速度でラプラスを掴んだのである。
〝納得(やはり)〟
「――――そうだ。私はこの力を手に入れた!」
ラプラスは、この展開が見えていた。知っていたからだ。
――不凍義ミズキにはある秘密がある。そして、その秘密は天剣と

しては絶対にあってはならない秘密なのである。本来の歴史においては、物語の中盤、偶然によって発覚するその秘密。

ミズキの頭には、耳。腰には尻尾がまとわりついていた。手は、毛に覆われている。

今のミズキは、猫だった。

半妖、と呼ばれる存在がいる、人と妖牙が交わり生まれた禁忌の存在。それが半妖である。ただでさえ、彼らはタブーであるとされる立場だが、それが天剣と妖牙の子供であるとしたらどうか。

――ミズキは、それが発覚すれば即座に討伐対象となる立場にあった。

だが、今。

ミズキはその力を開放している。それも、自在に。

「ラプラスぅ！　お前を殺すために！　私は妖牙に堕ちたんだ！」

叫ぶミズキ、ラプラスは何とかこの場を抜け出そうと体を揺らし、ケリをたたき込む――当然のように受け止められた。

「は、ハハハ！　効くもんか！　私は今、無敵とも言える力を手に入れた！　お前を殺すことはできなくとも、傷つけることは容易なんだ!!」

〃――〃

「お前のセーフティが発動するまで、じっくりこの手の力を強めてやろう」

そして、ゆっくりと頸を締める手に力を込める。真綿で首を絞められるというように、それは一種の拷問であった。

「ああ、ようやく　――ようやくお前を解らせてやれる。なぁ、ラプラス」

嗜虐に満ちた笑みで――――そして、どこか興奮と色気に満ちた笑みで、ミズキは言った。

「おまえは、私のものだ!!」

そう、宣言したのである。
しかし――
――果たして、それに待ったをかけるものが、いないだろうか。
否、いる。
「ねぇ、何してるのかなぁ、ミズキちゃん」
心底、低い声で。
――勝ち誇っていたミズキすら、一瞬体を震わせてラプラスを離してしまうほどに、重苦しい声で。
巫剣ヒツミは、ラプラスとミズキの逢瀬を見下ろしていた。
「な、あ――」
――ゲームにおける不凍義ミズキは、ある愛称で呼ばれていた。ファンからも、果ては公式からも、公然と呼ばれている愛称があった。
それは、ネタとしても、ミズキの行動を表するものとしても、何より、ミズキの身体的特徴からくるものを評したものとしても、あまりに的確としか言いようのない言葉だった。
それは――
「――この、泥棒猫」
常に、ヒツミの大切なものを意図せず奪う泥棒猫。
悪猫ミズキ、そして敗北者幼馴染ヒツミ。――ラプラスをめぐる執着に囚われた両者が――ラプラスを意思を無視して巻き込んで――ここに、激突した。

そのなな

――半妖、と呼ばれる存在がいる。

人と妖の間にあるもの。混ざりもの、人ではなく、妖でもないもの。排他される者。何を隠そう、不凍義ミズキは半妖である。

というのも、不凍義ミズキの父親は天剣だが、母親は妖牙なのだ。両者は自身の立場を明かさずに懇意になり、そしてお互いの立場を隠して一つになった。

娘であるミズキにすら、自身の出生の秘密を明かさずに、ミズキは天剣として成長した。

これは、ミズキルートにおいて明かされるミズキの絶対に知られてはならない秘密だ。どれくらい知られてはいけないかというと、判明した時点で不凍義ミズキを処刑せよという通達すらなく、周囲が動き出すレベルである。

アニオリ劇場版待ったなし。

判明した瞬間、隣りにいたヒツミが錫杖を向ける事態だ。

両者の関係は、ルートに入った中盤以降ということもあり、非常に良好である。だとしても、反射的に目の前で天剣が半妖になったと知れば、ヒツミは得物を突きつけてしまうのだ。

後に、その行為にどれだけ後悔したとしても。

半妖の何が厄介かといえば、自身が半妖であると自覚した瞬間に始まる侵食だろう。

――つまり、暴走である。野生に帰る、とでも言うのか、妖牙には温厚な知性を持つ存在もいるのだが、半妖にはそれがない。本能のままに暴力衝動でもって周囲を傷つける、それが半妖だ。

ミズキが半妖であることを明かされずに育ったのは、必然なわけだ。

つまり、現在暴走といえばスーパードスケベ暴走クイーンヒツミちゃん（エロ）なわけだが、本来ゲームにおいて暴走とはミズキのことを指した。

ミズキのルートは、半妖としての本能にのまれることに抗うミズキ

と、それをサポートする周囲の物語というわけだ。
悲劇しか見えない地獄行、最後には別れが待っている――と、いうのを想像させてプレイヤーをハラハラさせつつ、最後にはハッピーエンドが待っているのだが、
そのハッピーエンドとは、半妖としての域を超えるということ。
簡単に言うと、最終的にミズキは完全に妖牙になる。代わりに半妖の暴走衝動を失い、人間でこそなくなったが、ソラくんとともに生きていけるようになるのだ。
で、これがどういうことか。

今のミズキは完全に覚醒していた。

だから、彼女は半妖ではない。妖牙だ。
暴走の危険がないことは良いことだが、人をやめてしまった少女が、俺を――ラプラスを狙っている。ヒツミちゃんに続き、ミズキまで。
ああ、これはなんというか――
――きっと、他のヒロインたちもやばいことになっているんだろうなぁ、と。
今更ながら、覚悟を決めざるを得ないのだった。

◇

「――泥棒猫、泥棒猫！　泥棒猫ッッ！」
「違う！　おかしくなってしまったヒツミのためを思って、私は！」
天剣妖牙の主戦場、夜の山は破壊に満ちている。
空から降り注ぐ無数のスターライトに、地面は光に満ちたアイドルたちのライブ会場となり、荒れ狂う歓声の如き破壊音は、暴虐に満ちた少女の鉤爪から放たれていた。
「そんな事いって！　結局は自分のためにやったんじゃないですか！
ミズキちゃんの――裏切り者!!」

「裏切ってなどいない！　私の意思は変わらない、その証拠に半妖の呪いを私は乗り越えた！」
「結果、妖牙になった？　――ならやっぱり貴方は天剣じゃないじゃないですか！」
振り下ろした錫杖が、鉤爪の圧倒的暴力で弾かれる。
吹き飛んだヒツミちゃんを追いかけるミズキが、飛んできた流星に吹き飛ばされた。――と思えば、両者は上空で殴り合っているのだ。
――こわっ。
「目を覚ましてください、ミズキちゃん！　何があったのかは知りませんが、話し合えばわかるはずです！」
「何かあったのはヒツミの服装だろ!?」
飛んでくる余波を可能性の否定で避けながら、頂上決戦痴話喧嘩を俺は眺めていた。
――お互い、言っていることは至極正しい、ミズキを気遣うヒツミも、ヒツミの紐（あれを服とは認めない）にツッコミを入れるミズキも、全うなことを言っている。
だがそれはそれとして、今のヒツミちゃんはエロに魂を売ったおっぱいの化身であるし、ミズキちゃんは天剣という歴史の中で初めて誕生した妖牙への完全覚醒者である。
どちらも普通ではなかった。
さて。

――逃げるか。

「待ってください」
「待て」
蚊帳の外に置かれたことを確認し、早々に立ち去ろうとした俺の気配を、どうしてか両名は敏感に察知したらしい。俺は即座に両脇を固められた。
「逃しませんよ♥」
「殺す」

――端的に言って地獄ではないだろうか。
即座に、三つ巴による戦闘が始まっていた。
俺は何とか両者の攻撃をかいくぐりつつ、足場だった地面、生えていた樹木を盾に飛び回る。俺では両者を倒す決定打がないから、お互いの意識の片隅に常に存在感を放ちつつ、同士討ちをさせるのが理想だ。
この戦闘、優位に立っているのはヒツミちゃんであった。登場補正でミズキが圧倒するかと思ったが、ミズキは完全覚醒しても弱点を克服できていない。
つまり遠距離攻撃がない、対するヒツミちゃんはオールラウンダーだが、距離を取っての戦いを得意とする。常に自分に近づけないよう弾幕を展開しながら、隙を見せれば即座に近距離で打って出る。
そのスタイルは、間違いなくやっかい極まりないものである。
対して俺は――そもそもこれ、まともに戦闘ができているのか疑問だった。例えるなら最高難易度の音ゲーでノーツが見えていない状態。例えるならアクションゲーでほぼレバガチャとしか言いようのない動きでダメージを喰らいまくっている状態。
もちろんダメージはない、そこは本来のラプラスより高い能力を有しているのだ、これでダメージまで受けていたらそもそも俺がクソ雑魚ということになってしまう。
今はきっと、同格相手に慣れていないだけなのだ。これから同格の敵との経験を積めば、そのうち勝てるようになってくるはずなのだ。
とは言え今は、自分の意志で動いている時間より、余波や直撃でふっとばされている時間のほうが長い。ヒツミちゃんとミズキの実力は相性差はあれど、拮抗しているので、俺がいてもいなくても、両者の動きは変わらないのではないかという状態だ。
「そもそも、どうしてミズキちゃんが妖牙になっているんですか！ ミズキちゃんは天剣のはずでしょう！　それに、私のラプラスちゃんを付け狙うなんて、どうかしてます！」
「そいつはヒツミのものじゃない！　――ふん、そいつに聞いてみたらどうだ。全ての原因はその悪魔にある。ヒツミだって、そいつのせ

いで人生を狂わされたのだろう！」
——ヒツミちゃんの視線がこっちを向いた。
俺は気が付かないふりをした。それで流されてくれないかなぁ、——視線は雄弁だ。「後で詳しく」。ですよねぇ。
「私がこうなったのは自分の意志です！」
「なら、私だってそうだ！　私は私の意思で己の真実を知った！　それを乗り越える覚悟を決めた！」
振り上げられる鉤爪と、構えられる錫杖。
——狙われているのは俺だった。痴話喧嘩をしながら、あくまで本命はこっちということか——！
「私は、ラプラスちゃんを愛しています!!」
「ああ、私だってそうだ。愛おしいほどに——殺したくてしかたがない！」
——殺意。
なぜか、それはヒツミちゃんからもぶつけられていた。人が死なないのをいいことに、好き勝手ぶちまけたいものをぶちまけたくてしょうがないんじゃないか!?
胃の痛さ（幻痛）と、でも正直ちょっと美少女の取り合いに舞い上がりそうになる感情（幻覚）に苛まれながら、俺はぶつけられた一撃を何とか捌いて距離を取る。
先程から、時折嫌になるほど息ぴったりに二人は攻撃を叩きつけてくる。
〝拒絶！〟
ああふたりとも、俺のために争わないで——！
いや、ラプラスちゃんはそんなこと言わないが、しかしこの状況を前にすれば、流石に拒絶の意思を示すだろう。
「——あはっ、かわいい」
「死んでしまえええええ！」
こいつら無敵か！
叩きつけられた鉤爪を正面から受けつつ、飛んでくる流星にミズキを巻き込む。流石にミズキもその程度はお見通しだろうが、ここを利

用するのはヒツミちゃんの仕事だ。
俺は即座にミズキに最大速度で突進しつつ、ぽーんと邪魔だったのかミズキによって弾き飛ばされ、そこにヒツミが殺到した。
激突。
「あっはははははははは！」
「楽しいか、楽しいだろうなぁ！　ヒツミィ!!」
そして、弾け飛んだ。
――なんとか、二人の戦いに割って入っていけるのを感じる。
ほとんどいいようにあしらわれているが、こういう動きができるようになってきた。人類の武器は反復行動だというのがよく分かる。
俺の戦い方――環境を破壊しながらの攻撃――も、こうやって多くの反省の上に積み重ねられてきたのだ。
しかし――

俺の視界は、そこで途切れた。

――！
来た、と思う。
「――これは!?」
同時に、ミズキもまた驚きの声を上げる。
――幻覚だ。長時間の戦闘で、ついに効果が発揮されたのだろう。今回は特に何もみせず、ただ純粋に視界を奪うために使ってきたということか。
しかし、同時に効果が作用するってことは、完全覚醒したミズキのスペックは、今の自分に並ぶということか。そりゃあ、接近戦では分が悪すぎる。
「――――カゲロウ。ミズキちゃんも聞いたことがあるのでは？　私のお母様が得意とした術式。私のもう一つの切り札なんです」
「カゲロウ……チコ様のモノか！」
巫剣チコ。ヒツミちゃんの母親で――今は亡き先代の人柱。彼女もまた天剣であり、戦いの際にはこの術式を使い、夫であるテンホウ

を助けた、とかなんとか。
――使用までに一定時間は要するものの、一度効いてしまえば抜け出す術は今の所ない。
いや、一つだけ思い当たるところはあるが、アレはそもそも使用しては行けないので使えない。
ともかく、こうして体験して解る。
ヒツミちゃんをどうにかするには、そもそも直接対決で倒すだけの能力も必要だが――この術式の攻略も必須だ。視界がないのでは、俺ではそもそも戦いようがないのである。
「く……ヒツミ、こんなものまで！　テンホウ殿がどう思うか――！」
「くす♥　解ってるくせに、ミズキちゃんまでそんなこと言うんですね」
「……っ！」
――ふと、違和感。
今の会話、テンホウに何かあったという既知の情報を再確認するような代物だが、どこか含みがあった。――ヒツミとミズキ、両者の関係は敵対関係にあるが、会話の雰囲気は変わっていない。
簡単に言うと、この状態であっても戦闘が禁止されている昼ならば、普通に会話は成立し、お互いに交流は可能だろうということ。
だが、今の一点に限っては、どこかお互いの間に壁があるような――そんな違和感だった。
「さぁ――」
そして、そこに違和感を感じている間に、
「メインディッシュのお時間ですよ――ラプラスちゃん♥」
ヒツミちゃんの声が、俺の間近に迫っていた。
――まずい、と思う間もない。
「どうしようかなぁ、まずはお洋服を脱がせようかな。それからだきまくらにして――」
逃げるか、はたまたがむしゃらに抵抗するか。どちらにせよ――

「私もお洋服、脱いじゃおっかな。きゃ、ミズキちゃんにも恥ずかしいところ、見せちゃいますね♥」
ヒツミちゃんは、すぐそこまで迫っている。
「んふふ、だ、か、ら――見せつけちゃいましょう？」
俺はたまらずジリ……と、後ずさった。
――――そして、壁を背に感じた。最初からあったのか、ヒツミちゃんが用意したのか。
どちらにせよここが、ターニングポイントだ。そう、覚悟を決めて――――直後。

「――そうだな、ここが本番だ、ヒツミ」

凛とした声が、俺とヒツミの間から聞こえた。
それは、間違いない。
〝何故！〟
「――――ミズキちゃん、どうして庇うんですか？」
そう、ヒツミちゃんお言う通り。
不凍義ミズキは、俺を庇うようにして立っていた。
「当たり前だ。ヒツミ、お前のその心底恥ずかしい痴情にこいつを巻き込めば、こいつは社会的に死ぬ、そうだろう？」
「あはっ――だから、何だって言うんですか？」
……社会的って部分がなければ、すごく緊迫した場面なんだけどなぁ。
「だから――」
そして、気配を感じた。
――なるほど、ミズキはこれを感じているのだろう。視界を奪われてもなお、ミズキは問題なく動けるのだ。達人特有の、気配を察知して動けるがために。
「こいつを殺させない。こいつを殺すのは、私の役目なんだからな」

――ああ、その姿に、彼女の雄姿を直接見ることができないがために、俺は幻覚（ノットヒツミちゃん）を見た。

そして、こう思ってしまったのだ。

――野菜の星の……王子様。

もしも言葉が話せば、おもわず口に出してしまっていただろう。

俺は、ラプラスとしての自分に、心底感謝するのだった。

そのはち

――天剣の巫女、巫剣ヒツミ。

――堕ちた天剣にして妖牙、不凍義ミズキ。

互いに、戦いは激化の一途をたどっていた。無数に飛んでくる星星を、ミズキが己が両腕でかいくぐる。さながら宇宙をクロールで遊泳しているかのようで、けれどもその実態は、死という暴虐でもって地を征服する破壊者達の乱舞であった。

ぶつかり合うのは、意思だ。

互いの意思が、エゴが叩きつけ合う。

それは決して退けないという宣言であり、どうしたって押し通るという覚悟である。

はたして支えるのは自我は、本能か。

――膨れ上がった自我に突き動かされる少女は、無限にも思える星を生み出した。

――制御しきれない本能を武器に変えた少女は、それをただ拳と鉤爪で叩き壊す。

跪け、ここに己以外の勝利は必要ない。

ほざけ、ここに己以外の絶対は必要ない。

ただ、爆裂とだけ呼称することだけが許された、覇者達の激突がそこにあった。

「やっぱりミズキちゃんはすごいですねぇ、目が見えてないはずなのに、まるで見えているみたいに」

「見えているみたい、ではない。見えているのだ。私の視界は、視界に左右されるほどやわではない」

ヒツミの感心したような声に、ミズキは視界を封じながら、鉤爪を錫杖に叩きつけて応える。――ここまで接近したのだ。アレだけの弾幕に晒されながら――否、

今も弾幕に晒されながら。

――鉤爪が弾かれる。その勢いを利用して周囲に散らばった流星をかき消した。その勢いでケリを叩き込み、その余波が星を薙ぎ払

う。
　まるで、回転するように周囲の砲撃を弾き飛ばし、その度にヒツミの錫杖に攻撃を叩きつける。
「――しかし驚かないなヒツミ。いや、私もそうだが、お前のそれはまだ周囲を黙らせられる。しかし私は……」
「自分で言わないでよ、それに、私はミズキちゃんが半妖だろうと、妖牙だろうと変わらないですよ」
「――――だろうな」
　しかしここで注目するべきは、そんなミズキの一撃を錫杖で捌くヒツミだろう。いくら余計な動きが多いと言っても、ヒツミとミズキの身体スペック、格闘技術は大きな差がある。
　この距離まで近づかれてしまった時点で、不利なのはヒツミの方だ。だのに、それであってもヒツミは互角以上の戦いを演じているのは、彼女の才能あってこそ。
　これがラプラスなら、一瞬で首根っこを掴まれて猫のようにぷらーんとなっていることだろう。
「それにしても、お前のその衣装はなんだ。幾らなんでもその、破廉恥すぎるだろう。流石に周りも止めるんじゃないか？」
「……？　これのどこが破廉恥なんですか？　私のラプラスちゃんへの愛を表現しているだけだよ」
「――――そうか」
　言葉を交わし、拳を奔らせ、やがてこの状況を崩したのはヒツミだった。ヒツミは一切遠慮なく、コメットを自身に対して叩きつけた。流星になるのは術式だけではない、自分自身すら流星になるのだと言わんばかりに、流石にその運用は想定外だったのか、ミズキはヒツミを取り逃がす。
　――こうしてここで、戦況は再び振り出しに戻る。
　互いに距離を取り、静止した。
　ここで、故に二人は思考を巡らせる。両名の考えることは、ほぼ同一のものだった。――決着が付かない、この戦いはそれに尽きる。
　お互いにここから一切のミスなく戦闘を続けた場合、待っているの

は日の出だ。
先程の流星、虚を疲れて距離を稼がれたが、そもそも警戒していてもそう防げるものではない。ましてや、ヒツミの流星に限りはない、よってミズキはヒツミに接近し続けることが不可能になった。
対してミズキ、接近が可能であることをヒツミに見せつけた。それは決して偶然ではなく、互いに最善の読みの元、盤上のコマを動かしていった結果、必然としてたどり着いた接近だった。
――故に、ヒツミはミズキの決定打を受けることはない。
そして。
「なぁヒツミ――」
「ねぇ、ミズキちゃん――」
二人は感じていた。この子は――この少女は――変わっていない。
「退いてくれませんか」
「ここは下がってくれないか」
変わってないからこそ、変わっていない互いは告げた。相手に下がることをもとめた。
だって、自分は変わってしまったが、目の前の彼女はかつてと変わらないままの――変わってしまった幼馴染なのだから。
「……」
――ミズキは、ヒツミの知る限り、自分で抱え込みたがる少女だった。大事なことをいつも一人で秘密にして、そして最終的に抱えきれなくなる少女だ。
泥棒猫、と先ほどは言ったが――場合によっては、そうなってしまう少女であることを、ヒツミはよく知っている。
「――」
――ヒツミは、ミズキの知る限り、自分を数に入れない少女だった。絶対に譲れない事があった時、そこに自分を含まない。そして最後には自分を犠牲にしてしまう少女だ。

これは、母の影響が強いのではないかと、口にしたことはないがミズキは思っている。人柱の母を持つ少女――放っておけないと、常々思っていた。

だからつまり、

「――ぷ」

「――く」

彼女たちは互いに、自身の理由で譲ってもらいたいと思うと同時に、

――相手にこれ以上無茶をしないでほしいと思っているのだ。

「ぷ、ふふふふふふ」

「く、はははははは！」

互いに笑って、

過去を振り返って、そして。

――それから今（ラプラス）を思い出す。

故に、

「――――お断りします！」

「――――絶対に嫌だ！」

両者は、互いに構えた。

――動きを見せるのはミズキだ。ヒツミはすでに切り札を切っている。カゲロウの術式は、ヒツミのとっておきだったのだ。それを、ミズキは当たり前のように無視したが。

状況を変えられるのは自分だけ、しかし、だからこそ自分の敗北の可能性が下手すると五分以上になる。だからこそ、慎重だった。

なにせこの一撃――

「――宣言する、この戦いはここで終わる」

「そう、でしょうね」

――文字通り、一撃必殺なのだから。

この場合、必殺とはヒツミだけを意味しない。

「それを、私が対処できれば貴方の負け」

「――対処できなければ、お前の負けだ」
諸刃の刃。放てば以降の戦闘活動が不可能になる。しかし、決着を突けるには十分すぎる火力を有する、故に、一撃必殺。
ミズキは、それを放とうとしていた。
――地に手を付ける。前傾の姿勢、片方の手は、前に突き出して、彼女の一撃は、突進だった。
「来て――」
それに対し、ヒツミは無数の星々を呼び出した。
直接受け止めることは諦めた。ヒツミの最大の武器はこの手数、一度で止めようなどとは思わない。止めるまでぶつける。ヒツミの手段はこれだけだった。
「――行くぞ」
対してミズキはもう止まれない。
更に体を深く沈み込ませ――そして、それを放った。
「――〝ミカヅチ〟！」
雷電一閃。
妖牙ミズキは、稲妻となった。全てをここで、終わらせるために。
そして。
その余波が、地をえぐる。
世界に天地の概念がなくなったのだ。一瞬で、ミズキ、ヒツミ、両名の周囲数百メートルが陥没し、ミズキはすでに踏み出していた一歩で前に進む。
発射は、すでに終わっているのだ。
ヒツミは覚悟を決める。これを止めなければ勝利はない、そして、勝利がないからこそ、ヒツミはここで勝利する。止めればいいのだ、止めてしまえばもうミズキは動けない。だから、今はこれだけに集中すればいい。

――集中。
当然それはミズキも同様だった。ここで手を抜けば、絶対に向こうは勝利する。だからこそ、そこで他人を意識することは不可能だった。
そう、不可能だったのだ。
だから詰んでいた。
思いもしなかったのだ。
えぐれた大地、消し飛んで、顕になった空白に、
ラプラスが潜んでいることなど、これっぽっちも。
〝補足〟
――ラプラスは、可能性の否定で地に潜み、そして。
この瞬間を、待っていた。
「は――」
「――なっ！」
互いに、ミズキもヒツミも、それを理解できない。あまりにも想定外過ぎたのだ。ラプラスが潜んでいることなど。目が見えないはずのラプラスが、音を頼りに自分たちを補足することが可能だということなど。――そして、この戦いが終わった後に待ち受ける現実に対抗するため、
総取りを狙ったことなど。
ラプラスの手が、両者の足を掴んだ。
――そこに、飛び出していたミズキの勢いが加わる。――三者、止まることは不可能だ。可能性を否定できるラプラスを除いて。
だから、ラプラスはそこに少しだけベクトルを加えた。
飛び出して、やがて地面に着弾するミズキを、それによって吹き飛

ばされるヒツミを、斜め上の上空へ。
——決して、ラプラスのことを両者が忘れていたわけではない、そもそもこの戦いはラプラスのある意味の所有者を決めるための戦いで、ラプラスを詰ませたと思っていたからこそ、憂いなくお互いの雌雄を決するための戦いだった。
だが、違った。
ラプラスは詰んでなどいなかった。どころか、逆転の一手を掴み取った。——決して油断できない相手であると、解ってはいたが、しかし。
ヒツミにしろ、ミズキにしろ——あの場でラプラスに意識を向けた時点で自分は負けるのだ。
それほどの拮抗が、ラプラスにとっては最高の好機を生んだ。
それほどの拮抗を生み出す者同士だと、ラプラスは知っていた。だから掴んだ。この一瞬を、——故に胸を張って、ラプラスは強者二人に告げるのだ。

〝王手（チェック）！〟

勝利を。
——かくして、頂上決戦に挑んだ二人のヒロインは、彼女たちが取り合うはずだった執着の対象によって、天高く、遠く遠くへ——打ち上げられたのだった。

◇

——大勝利である。
いやぁ、あそこまで快勝できたのは久しぶりだ。決定打の低さから、よく強敵と戦うとグダグダになっていた俺としては、あそこまできっちり勝ちを決められたのは、結構貴重な体験である。
そんなわけで、今日はヒツミちゃんのお仕掛け訪問もなく、意気揚々と登校したのだが——

「ラプラス先輩？」

――ソラくんがすごい笑顔で待ち構えていた。

えっ、何この顔こわっ、笑ってるのに殺されそう、ヒツミちゃんともミズキちゃんとも違う殺意。少し考える……が、考えるまでもなく、昨日の一件であることは疑いようのない事実だった。

『何でしょう』

おそるおそる、タブレットを差し出す。

なんかこう、ラプラスの可愛さに免じて許してくれないかな、と思いつつ――

「――昨夜、突如この地を治める天剣の最強戦力二名が、隣の県の山奥まで飛ばされた件について、先輩はなにかご存知ですね？」

――問いかけですらなかった。

断定でもって語られるそれに、俺は一瞬だけまよって、ふるふると筆を震わせながら返答した。

『はひ』

あっ、いが歪んだ。

「帰ってくるにも、車で一日以上かかるそうです。明日、この地には抑止力となる天剣が一人もいないんですよ？」

『はい』

今度はちゃんとかけた。

「――もし、無償で手伝ってくれる優しい悪魔がいらっしゃれば、解決するのですが……」

一瞬沈黙。

『はい』

――拒否なんて無理ですよ！　直接殺しにかかってくるミズキより怖い！　ヒツミちゃんのほうがもっと怖いけど。

「じゃあ、放課後は二人で社務所の方まで行きましょう。僕も一昨日の件で、社務所の事務仕事をお手伝いする約束になってますので」

――こうして。俺はソラくんに連れられて、ヒツミちゃん達が

不在の天剣の本拠地へ向かうことになるのだった。

◇

……そういえば、三日目の天剣社務所といえば、あのイベントが起きるタイミングじゃないか？

ということは、

――もしかしたら俺は、ここで三人目に出会うことに、なるかもしれないな。

そのきゆう

――この世に地獄があるとするなら、それは間違いなくここだった。

天剣巫剣家社務所、この辺り一体を取りまとめる巫剣家を支える事務方は、ここに全て集約されている。ゲームにおいても、ここはブラック労働にとりつかれた闇の間と化しており、たまにシーンが描写されると、大抵事務を行っているモブ天剣や、専門の事務員が悲鳴を上げていたが――

この世界における社務所と、ゲームの社務所の違いは、仕事を行っているモブ天剣がいないことだろう。そして、モブ天剣の代わりに書類が置かれている。

これ、人手が減った分、減っただけの仕事がそのまま増えているということだよな。

わぁ地獄。

ブラックすぎて死んだことのある身としては、その状況に同情するがしかし、幾らなんでもここまで仕事が山積みになるということは、前世でもなかった。

いや本当これはひどい……

「おまたせしました。天影ソラ、ただいま到着しました！」

〝到着〟

そんな中を、俺はソラくんに連れられての入場である。ソラくんの姿は、さながら窮地に駆けつけた増援。軍隊の兵士であるかのようだ。

その様子に、二つの人影が書類の中から起き上がってくる。ガバっと、秒速5センチくらいで。

「ソラくん!!」

「待ってたわ!!」

起き上がったのは二人の女性、黒髪のおっぱいが大きい美人なお姉さん（死にかけ）と、茶髪のおっぱいが大きい美人のお姉さん（瀕死）だ。

どっちも顔はいいのに、死相が見える。やつれているのは丸わかりだ。
「すいません、直ぐに回復術式用意します」
「助かるわ、終わったらあっちの書類からお願いしていいかしら！」
「私飲み物用意するわ、あの子も来たのよね」
「はい！」
——と、そう言って茶髪の女性のほうが俺に視線を向ける。パタパタとかけていったソラくんと交差して、起き上がった女性はふらふらとこっちに寄ってくる。
ああ、そこで倒れたら書類がひどいことになりますよ。
〝危険〟
慌てて、よろめいた彼女を支える、そこで女性は一瞬呆けてから、ハッとしたようにこっちを見た。
「ありがとう、よく来てくれたわねラプラスちゃん」
『いえいえ』
俺はタブレットを取り出して会話する、この女性の名前は国都ヒロエ、黒髪の方は天都ユキエ。ふたりとも代々天剣に使える事務方の一族の出である。
ヒロエさんは、俺を社務所の比較的荷物が少ないソファに案内すると、紅茶を出してくれた。ついでに自分の分も用意しつつ、ユキエさんにも、ソラくんにも飲み物をわたしている。
「ええと、来てもらってそうそうに悪いのだけど、事情はソラくんから聞いているわよね」
『すごい形相で迫られました』
「ソラくん？」
「そういうのはお姉さんたちにしなさいっていつもいってるでしょ!?」
「言ってないですよね?!」
——向こうの方は楽しそうだ。
ともあれ、事情に関しては大体把握している。ここに来るまでにソラくんに聞いている。もともと社務所は人手不足と仕事が多すぎる

ために、日夜ブラック勤労を迫られる楽しい職場だった。
しかしそれが、最近はあちこちで妖牙が発生しており、この対処のために天剣がひっきりなしに駆り出され、手が空いていないのだという。
ここまではゲームの事情とさほど変わりはない、妖牙が最近頻繁に出没しているのは、ゲームでもそうだがとある組織の暗躍によるものだ。二日前にヒツミちゃんが一撃で叩き切った――ゲームでは死闘の末に撃退した――あの妖牙も、その組織が生み出した改造妖牙である。
だから人手が足りず、難しい立場であるソラくんが、事務方として後方支援に参加するようになるのだが、この世界では事件発生から三日目にして、完全に事務員の一人として戦力に数えられているようである。
「今から一年と少し前、ヒツミお嬢様が天剣を取りまとめるようになって以来、ソラくんへの当たりも和らいだ。結果として、こうして帰ってきて直ぐに、私達の手伝いをスムーズにしてくれてるわけだけど」
――やはり、この辺りの理由は天剣巫剣家の実権が、テンホウからヒツミちゃんへ移っていることが背景にあるようだ。
とはいえ、俺はその概要を知らないし、こんな忙しい状況で聞けるはずもないので、スルーした。
「もちろん、それでも人手は全然足りないんだけど、他に頼れる人がいるはずもないし、今回だって相当なイレギュラーよ」
ソラくんがヒロミさんの脇にやってきて、御札を一枚手渡す。回復術式キョンシー。体に溜まった疲労をポンっと消し飛ばし、ゾンビのごとく働けるようになる素敵極まりない術式だ。
額に御札を貼り付けると、ヒロミさんは構わず続ける。
「いくら貴方がヒツミお嬢様とミズキさんを隣の県にふっとばしたからって、それは単なる戦闘行為の結果に過ぎない、その責任を求めるのは非常識……それは解ってる」
――ソラくんはとてもとても怒っていたが、そもそもソラくんは俺

に限らず、ヒツミにもミズキにも怒りを覚えているように思える。
当たり前といえば当たり前だが、あの二人が俺を狙うのは私情によるものが大きいからだ。この二日、事務方として天剣に復帰したソラくんは、二人の行動を客観視してしまえるから、思うところがあるのだろう。
それはそれとして、アレは怖かった。
「お願い、私達に力を貸してほしいの！　いつもみたいに賽銭箱を置いていっても、今日は何も言わないから！」
『そもそも直接依頼するのなら、賽銭箱は必要ないのではないでしょうか』
――いつもなら賽銭箱の中にちょっとした呪詛の籠もったお礼の手紙が混じっているのだが、今日はそれすら言っていられない状況のようだ。
生まれて初めて天剣の方から頼られたわけだが、そんな時に限って、俺としてはこの依頼、そもそも受けない理由がないのであった。
『今回に関してはお代はいりません。私も少し気になるところがあるので、渡りに船です』
「ほんとう⁉　すごく助かるわ！」
そうやって、俺の手を取るキョンシーヒロエさん。死にそうな顔で、瞳だけは活力に満ちているガンギマリ具合は、とても怖い。
俺は少しだけ後ろに引いた。
〝許諾〟
手が使えないので思念で返す。
こうなったからには任せなさい、俺はラプラスの悪魔なのであるからして、ヒツミちゃんとミズキ以外にはそうそう負けない自信があるのだ。
ところで――
「――ああああ！　どうしてあいつらはいつもいつも、装備を壊して返してくるのよ！　これ一つ修繕するのにいくら掛かるのかしらないの⁉」
「ユキエさん！　こっちの書類一切分類されてないんですが、どれを

どうわければいいんですか!?」
「そっちの下着は私たちが着替える時に放り捨てた奴、そっちの書類はそもそもどれも処理する価値ないからキにしないで！　どうして経費で温泉旅行が出来るとおもってるのよこのスカポンタン！」
「待ってください下着のことは聞いてません！」
――戦場がそこにはあった。
そろそろアレに加わらなくて大丈夫だろうか、俺は引きつった笑い――を浮かべたつもりで――タブレットをかざした。
『大丈夫ですか、アレ』
「大丈夫じゃないわ、ちなみに今の私の下着の色は黄色よ」
『とても返答しにくい情報を付け加えないでください』
まず黄色ってなんだろう。
黄色……？
『とにかく、一つ提案があります』
「なにかしら」
『白狐の社との情報交換は、今日はまだではないですか？　妖牙退治のついでに、そちらへの連絡を私が担いたいのですが』
「……」
――ヒロエさんは沈黙した。
数秒、何かを考えているのだろうか。
「とっても助か」
返答は、凄まじくシンプルなものだった。
いや、違う。
直後。

――ヒロエさんはそのまま机に倒れて動かなくなった。

「ひ、ヒロエ――――！」
悲痛なユキエさんの叫びが響く。ああ、ヒロポン術式ではもう足りないくらいに疲れてしまっていたのを、まざまざと見せつけられることになるのだった。

◇

「――ラプラス先輩、行っちゃいましたね。一人で良かったんですか？」
「出せる人材がいないってのはあるけどね、あの子はポンコツだけどびっくりするくらいしっかりしてるから」
「矛盾しているような……？」
「大人だってミスをするのよー」
――ラプラスが白狐の社に向かってすぐ、ソラとユキエが話をしながら書類の処理を続ける。両者の処理速度はほとんど変わらない、これはソラが優秀であるということであって、ユキエが優秀ではないという意味ではない。
むしろ、ソラが優秀過ぎるのだ、彼の事務処理速度は天才のそれというべきだろう。
「これとこれ、優先度低いので明日に回しましょう」
「じゃあこっちをお願い」
「うわ、これ最重要じゃないですか、いいんですか？　僕に任せちゃって」
「いいのよ、――もう、君に文句を言う奴はここに残ってないしね」
そうやって語るユキエの顔は、どこか郷愁と、それから爽やかさが混ざり合っていた。色々と鬱憤が溜まっていたのだろう。
――ソラが天剣から追放される時、一番に惜しんでくれたのは社務所の人間だ。彼女たちにとって、ソラの天剣復帰は助っ人としての実力以外にも、思うことが山ほどある。
「ほんと、ヒツミお嬢様がイザナミを持ち出して実権をにぎってから、いろんなことが変わったわ」
「……やっぱり、そうだったんですね」
――ソラは、ユキエの言葉にうなずく。
そもそも、いくら天剣が超絶ブラック環境だったとしても、ここまで人が少ないということは早々ないのだ。これは天剣巫剣家の中で、

大きな変化があった証明である。
変化――つまり、
「ヒツミお嬢様は、実権を握ってすぐに、ソラくんを追い出した連中、それから巫剣家の実務に協力的じゃない連中を追い出したわ、物理的に」
改革だ。
天剣巫剣家は千年続く天剣の大家である。巫剣家が治めるこの土地は、神宝イザナミを抱えることもあって、非常に重要な土地だ。そして、そんな伝統と重要の詰まったこの土地には、簡単に言うと寄生する人間が大量に居た。
利権がどうの、というやつだ。
ソラを追い出したのも、この派閥である。
「結果として事務仕事は増えたけどね。……でも、それでも精々倍に増えたくらいだから、あいつらがどれだけサボってたのかが解って頭痛いわ……」
「あはは……」
社務所の専門事務員は二人なのに対し、利権を貪っていた連中は十では足りない数いたのだ。これで仕事をしていたというのだから、面の皮が厚いとユキエは愚痴る。
「――そうやって、今は大変だけど、ヒツミお嬢様が当主となったことで、いろんなことがいい方向に傾いてる。でも……」
「……やっぱり、イザナミですか」
「うん。……お嬢様は大丈夫って言うけど――」
神宝イザナミ。
あれは、呪いの神宝だ。ヒツミは適応したといった。実際、適応してからここまで彼女の体に異変はない、毎日ヒロエとユキエがチェックはしているから、それは絶対だ。
だが――
「……僕も、危険だと思います」
ソラは肯定した。
あれが、神の呪いがそんなもので終わるものだろうか――と。

「……ラプラスちゃんは、それを解ってるのかしら」
「今のヒツミの執着の対象はラプラスです。昨日もミズキとともにラプラスと交戦したそうですし……」
「執着されているからこそ、一番解る……か。そうだといいのだけどね」
そうやって話に区切りをつけて、そう言えばとユキエは思い出す。
「それにしても、ようやくラプラスちゃんも白狐の社に顔を出す気になったのね」
「……？　どういうことですか？」
「ああ、ソラくんは知らないわよね、今、白狐の社は――」
白狐の社。
巫剣の土地にあって、穏健派の妖牙たちが居を構える森のことだ。
彼ら穏健派と巫剣家は古くから繋がりがあり、今回ラプラスが行ったように、時折両者の間で情報交換が行われることがある。
しかし、そんな白狐の社は、今――

◇

――思考が停止している。
いや、いやいや、いやいやいやいや、ちょっとまってまって！
何事か、目の前の光景が理解できない。いや、理解したくない。できなくはないけどしたくない。
俺は、とある目的からこの社に訪れたわけだが、しかしおかしなが起きている。
いや、おかしいのは俺なのか？
白狐の社、妖牙にも悪いやつといいヤツがいるわけだけど――ミズキの母親はいい妖牙だ――そのうちの、善玉が集まる社、全国各地にある霊地と呼ばれる場所で、ようするに妖牙たちにとって最適な生活環境である。
これを守るために、巫剣と白狐の社は協力関係にあり、今回俺がやってきたのは、その意思を確認するため、だったのだが。

――ゲームに置いて、荘厳の一言で言い切れないほどに神秘的な静謐に満ちていたその社は、しかし。

今、至るところに俺――ラプラスの置物が設置されていた。

いやいやいや。

その置物は、さながらご神体のごとく祀られて、足元にはお供えのためか、花だのなんだのが置かれている。というか、妖牙たちがすごい勢いで拝んでいる――――

……まて、そんな状況に本物が現れるって、とてもまずいことではないか？

気がついた時には遅かった。俺の周囲に、数十もの妖牙たちがひれ伏していた。

〝何事!!〟

思念で叫ぶ、ああ、混乱が彼らに伝わらない。向こうは完全にこちらを礼拝していて、思念だけで意思が伝わってくれる状況ではない。

かといってタブレットは彼らにはそもそも理解してもらえない!!

〝窮地！〟

〝救助！〟

〝要請！〟

必死に単語を重ねて叫ぶが、けれどもこの場にはソラくんもいないし、ヒツミちゃんとミズキは俺が吹き飛ばしてしまった。

どうしようもない状況で――しかし、

「静まレ！　静まレ！」

そこに、声がした。

ああ、彼女は――――

――現れたのは、金髪のあどけなさが残る少女だった。

ゆったりとした白装束は、神官という言葉を思わせる、どこか厳かで、それでいてこの場に限りなくふさわしいと思わせる力のあるものだ。

ラプラスより少し背が高い程度、小柄で、可愛らしいがその顔は真面目さがにじみ出ている。

――この場で出てくることから察しが付くだろうが、彼女はこのゲーム四人のヒロインが一人。

白狐の社にて育った――半妖とされる少女。

「お騒がせいたしましタ。突然の御無礼を失礼いたしまス」

〝心配〟

〝無用〟

驚いただけだと返す。

――独特なイントネーションは、彼女の特殊な育ちに由来する。彼女は、人ではないとされている。であるがゆえに、白狐の社で育ったのだ。

人ではなく、妖牙に育てられた少女。

「改めましテ、白狐（シロギツネ）クロと申します」

――クロちゃんは、そして。

彼女もまた俺の前にひざまずいた。

「ああ、ラプラス様――今宵も我ら妖牙の一族が、平穏の元過ごせたこと、感謝致します」

そこだけは、一切淀みのないイントネーションで。

ゲームではどれだけ治そうと思っても直せなかったイントネーションが、しかしこの言葉だけは一切何ら問題なく。

俺を崇拝するものとして、紡がれていた。

その様子に、天を仰いで俺は思う。

――周囲には無数のラプラス人形。そしてそれに礼賛する妖牙たち。

そうか。今度はそう来たか――――

もはや諦めの境地に達した俺は、ただそう、ぽつりと思うのだった。

そのじゅう

白狐クロ。

ゲームにおいては四番目に登場する、金髪ちびっこ。半妖を自称する生まれも育ちも白狐の社な、妖牙に育てられた少女だ。

彼女の魅力はなんと言っても二面性だろう、社と巫剣をつなぐ神官としての側面と、森育ちの野性的な側面。ちょっと独特な訛りも独特だ。

社の代表を務めるだけあって、礼儀作法も完璧、金髪なのもあってお嬢様感は正直ヒツミちゃんより大きい。しかしその素とも言える状態は世間知らずの野生児。

ソラくんと出会って少し、クロちゃんは学校に通うことになる、ソラくんもヒツミちゃんもミズキもまったく心配していなかったのだが、実は生活力皆無、人間社会への適正皆無だったクロちゃんは学校で盛大にやらかすことになる。

その度に他のものがフォローに回るのだが……フォローすればするほど別の問題が発生し……といったところだ。とはいえ、そこからクロちゃんは成長し、最終的にはソラくんに手料理を振る舞うことになるのだが、まぁそこら辺は置いておこう。

クロちゃんの最大のパーソナリティは半妖という立場である。ミズキのときに触れたが、そもそも半妖とは存在できないはずの種族だ。常に破壊衝動に襲われ、人間にも、妖牙にもなれず、討伐されなくてはならない立場の種族。

半妖と本人が自覚しなければいいのだから、中には自分が半妖であることを知ることなく一生を終える者もいるだろうが、そもそもそれは半妖ではないのだ、だから半妖に人として、妖牙として生活できるものはいない。

だというのに、クロちゃんは半妖だと自称する。そして、それが問題になっていない。ゲームにおいても、だ。ゲームにおける巫剣の上層部はヒツミちゃんが一掃してないのもあって、権利とか欲望で面の皮を厚くしている連中ばかりなのだけど、そういう連中もやり玉に上

げない。
何故か、といえばなんとなく察しが付くだろう、そもそもクロちゃんは半妖ではない。
純然たる人間だ。
色々あって、森に捨てられた人間の子供、それを森の妖牙たちが拾って育てたのが、クロ。クロは人間であるが、妖牙たちの子供であるという自負から半妖を名乗り、しかしただの自称であるのでそういう事を気にする人間は何一つ気にしていない、というのが真相だ。
とはいえ、クロちゃん自身は普通に自分を半妖だと思っているし、そうでないということは、彼女のアイデンティティを奪うということでもあるのだが――
まぁそれはゲーム本編の話。
この世界におけるクロちゃんはどうやら、俺の知らないうちに、俺の信者になっていたらしい。……頭が痛くなってきた。
ああ、これ四人目のあの子はどうなるんだろう、普通な子だったんだけどな……

◇

「――こちらでよろしかったでしょうか」
『ありがとうございます』
クロちゃんに案内されて、俺は目的地へとやってきた。俺がここにやってきた目的は三つ、一つは巫剣の代理としての役目。
幸いなことに、現在社で大きな変化はなく――今の所――これはスムーズに片付いた。
というか、これだけを目的とするなら、下っ端の天剣でも問題なくこなせるのだが、残念なことに巫剣家のある山と、白狐の社がある山は正反対の場所にある。
四方を山に囲まれたこの街は、人口が軽く十万を超える大規模な地方都市である。端から端へ行って帰るにも何時間か経過してしまうため、人を遣わせるにも一苦労というわけだ。

そして、二つ目――

「それにしてモ、〝ヒラサカ〟にご用とハ、何かあったのでしょうカ」

『ヒツミさん関連です、といえばわかりませんか？』

「あの方ですカ……納得でス」

――この社にある〝ヒラサカ〟の様子を見に来るためだ。

ヒラサカ、というのは簡単に言うと神宝イザナミを納めておく場所である。黄泉平坂というやつだ。ヒツミちゃんはここを通って、イザナミを入手したのである。

他にもここは、他の可能性の世界との交信にも使用できる。おそらくヒツミちゃんはここでラプラスの可能性を見て、結果としてラプラスに執着したのだ。

「ヒツミ様はイザナミを手に入れてかラ、変わられてしまいましタ」

『そうですね。でも、根底にあるのは変わっていないはずなんですよ』

ヒツミちゃんとクロちゃんは当然ながら顔見知りだ。クロちゃんにとっても、ヒツミちゃんは幼馴染というべき存在なのだ。

幼馴染が多すぎてまるでヒツミちゃんハーレムみたいだぁ。

まぁ自分のルート以外だとソラくんを盗られるんですが。

「あの方ハ……何を思っテ、イザナミを身に纏ったのでしょウ」

『ヒツミちゃんは、ずっと思っているんです。自分には自分の役割がある、と』

「役割……ラプラス様はご存知なのですカ？」

『私は、同じですから』

――ラプラスとヒツミはその根底が似通っている。ヒツミちゃんはそれを知っているからラプラスに執着している。

多分ヒツミちゃんは、俺を救うことが自分の役目だと思っているのだろう。

「……それハ、良いことなのでしょうカ？」

『わかりません。そのためにはこの中に入って、調査をしなくては行けないのですが、それは今じゃなくてもいいのですよね』

「……？」

今日はあくまで様子見だ。見たところヒラサカに異変はない。も

し異変があったら、白狐の社から巫剣に伝わっているだろうが、それでも自分で確認しておきたかったのだ。
結果として、今は大丈夫という結論に落ち着く。――ヒツミちゃんのイザナミが暴走していないのと、同じ結果に終わった。
そして、そもそも今日このヒラサカに潜るわけには行かないのだ。
なにせ今日はゲームと同じスケジュールなら、あるイベントが起こるのだから。
これだけブレイクしているのに、それが起きるのかと思うが、おそらく起きる。一日目に発生した改造妖牙もそうだが、今回のイベントもその改造妖牙絡みだ。
つまり、この改造妖牙を繰り出す連中は、俺に執着していないのだ。まぁ、あの組織にヒロインの関係者はいないからな。
さて、襲撃はまだなようなので、ここで俺は少し切り込むことにした。
『ところで』
「はイ」
まぁ、俺がここに来た以上、触れなくてはならないそれはつまり――

『どうして社のあちこちに私の人形があるんですか？』

この社のあちこちに所狭しと設置されたラプラス人形のことである。そのサイズは等身大から手のひらサイズ、デフォルメされたものなどなど、それはもう凄まじい種類だ。
同じものも大量にあり、だいたいそれら一つ一つに複数の妖牙が礼賛している。
異様な光景だった。
これでは白狐の社ではなくラプラスの社である。
「はイ！　我々の信仰の証でス！」
『いえそうではなく』
俺がそれを指摘するとクロちゃんはそれはもうすごい勢いで反応

した。顔が近い、あっ、いい匂い。……いい匂い？
「我々は信仰に目覚めたのでス！　ラプラス様！　貴方は私達の女神でス！」
『この社は白狐の社でしょう!?』
――白狐の社、名前の通りに、ここにはまとめ役がいる。
クロちゃんの母親代わりとも言える存在であり――この社で祀られる神獣、とでも呼ぶべき存在である。それが――どうして俺にすげ変わっているのだ？
「もウ、言わせないでくださいよウ」
『恥ずかしがってないで……というか白狐はどうしたのですか』
――そして、ここの主であり、クロちゃんの母親でもある妖牙、〝白狐〟。彼女が現れないのは、そういうことならおかしい。
なにせ、このラプラス信仰が白狐の意思なら、彼女こそ真っ先にここへ出てくるべき存在ではないか。自分で言うのも何だが、俺は彼女たちにとって、何よりも尊い存在のはずなのだから。
実際、今もクロちゃんは俺に低姿勢だし……いや低姿勢すぎない？
ちょっとスカートの中とか覗こうとしてない!?
「――チッ」
あっ、今舌打ちした!?
『クロさん!?』
「いエ、なんでもないですヨ――？」
この子、マジメではあるのだが、結構強かだ、ゲームでもそうだが、基本的に巫剣と社のバランサーとしての役割があるので、ゲームにおける腐った巫剣の連中と丁々発止やりあっていたのだから、当然といえば当然か。
とりあえずペシッとしておいた。
「んんんんん――――!!」
いかん、逆効果だ！
びくびくと、その場で痙攣して動かなくなったクロちゃん。ああ、口から信仰が漏れている……
「……びゃ、白狐様でしたラ……」

そして、その状態でちゃんと答えようとしている。俺はそっと制服のスカートを抑えつつ距離をとって、話に耳を傾ける。

「出稼ぎしていまス」

『でかせぎ』

そして、ちょっと理解できずにひらがなで打ち込んでしまった。

いや、でかせぎ？

「……白狐様だけでなク、多くの妖牙が外に出ていまス。なぜなら――」

『なぜなら』

どうやら、この場に白狐がいないということは確からしい。

が、しかし、一体何のために――――？

その時だった。遠くからけたたましい破壊音が響く。

――こんな時に!!

襲撃だ。俺が想定していた三つ目の目的、改造妖牙の襲撃、それが起こってしまったのだ。こんな時に！　――直後、ガバっとクロちゃんが立ち上がる。

「何事ですカ!?」

周囲に向かって叫び、音の方へ向かう。俺もそれに続いた。

◇

暴れていたのは、亀の妖牙だった。

鈍重で、とにかく堅い。元は温厚だったかもしれないが、改造され、今は手当り次第に辺りを破壊している。隣では、クロちゃんが悲痛そうな顔でそれを見ていた。

同じ妖牙として、これは見過ごせない事態だろう。

「アレハ……例の改造されたという妖牙ですカ、痛ましイ」

そして、周囲の妖牙を下がらせる、彼らはクロちゃんがここに到着するまでの時間稼ぎを受け持っていたのだ。体のあちこちにキズが見える。

「――下がっていてくださイ、ラプラス様」

〝疑問〟

俺はクロちゃんの言葉に待ったをかける。クロちゃんはどうやら一人であれを討伐するようだ。しかし、クロちゃんの力では、あいつは相性が悪い。

なにせクロちゃんは手数で戦う。ゲームでは最初は意気揚々と一人で出ていったクロちゃんが、苦戦してヒツミちゃんたちの援護を受ける流れだった。

だから――

「問題ありません、私ハ、あの程度なら即座に片付けられまス」

ああ、ゲームと同じセリフを――

君の術式〝タマモ〟では、どうやったってあの亀は倒せない――

―

「参ります。――〝ハクメン〟！」

――あれ？

直後、クロちゃんの頭に耳が、背に尻尾が生えた。狐のものだ、ただし本物ではなく、光で作られた実体。背の尻尾は九つ、白面金毛九尾の狐というが、つまり彼女の術式はそういう代物だ。

だが、しかし。

本来彼女が使うのはタマモという術式で、それが生み出す尻尾は一つ、ハクメンという術式はゲーム終盤に会得する――覚醒した直後の必殺技というやつのはずだ。

いや、それはミズキの完全覚醒も同様、しかしクロちゃんの問題は、これを使用する条件の一つに――

「――遅イ」

思考している中、クロちゃんが駆ける。足元に狐火を出現させ、そ

れをさながらブースターの如くふかして突撃するのだ。異能バトルの世界にあって、一人だけロボットものか何かのような機動で亀に肉薄したクロちゃんは、手を亀にかざす。

そして、地面から強大な白い炎を炸裂させた。

あまりの勢いに、亀が転倒する。そこへ両腕に狐火をまとわせ、素早さを生かした連打をたたき込む。甲羅は堅いが、しかしみせてしまった腹はわかりやすい弱点だ。

みるみるうちにそこが傷つき、亀はけたたましい雄叫びをあげた。

「終わりでス」

そして、一気に飛び上がると、無数の炎を生み出し、亀に叩きつけつつ、足に灯った狐火をライダーキックの如く亀に突き刺した！

結局、亀は何一ついいところなく、消滅した。

いや、強い……まぁ、これもある意味、当然といえば当然なのかもしれないけど――

「――ご無事ですカ？　ラプラス様」

『大丈夫です。しかしクロさん。その術式は――』

「あア、これですカ？」

――その術式は、人間にしか使えないはずだ。

少なくとも、半妖を自称するクロには、使おうという意思も生まれないだろう。だと言うのに――

「――全てハ、ラプラス様のおかげでス」

そう言って、クロちゃんは私にひざまずく。もしや、これは――

「ラプラス様が目覚めさせてくれたのでス、私は――そウ、人であるト!!」

――ああ、またしても。

一体どこでどうなって、こうなったのだろう、たとえ直接的な原因は俺にあるとしても、きっとそこに至るまでのあれやこれやは、とんでもない七転八倒があったはずだ。

ミズキだってそうだが、どうしてこうなったとしか言えないのは、

一体全体なんなのだろう。
――――まだ、どうしてイザナミを纏ったのか、なんとなく経緯がわかるヒツミちゃんが、俺にとっては癒やしに思えてならないのだった。

〈〉

『ところで』
「何でしょウ」
『私の人形はどこから来たのですか？』
「通販でス。白狐様モ、通販でラプラス人形を買い漁るために出稼ぎに出ているのでス」
『なるほど』
――――なるほど!?

そのじゅういち

『ソラくん！　ヒツミさん！』

――翌日、隣県から帰ってきたヒツミさんと、長丁場の修羅場をくぐり抜けて、巫剣家から登校していた二人に、俺はすごい勢いで飛びかかった。

「どうしたのぉ？」

「なんですか？」

『こここれこれこここここここ』

「落ち着いてください!?」

深呼吸をする。

ヒツミちゃんが背中を擦ってくれた。あ、ちょっと服がめくれる――バッと飛び退いて、クスクスと笑うヒツミちゃんを睨んだ。もし俺がブラをしていたら間違いなく外されていただろう。

よかったな必要のない貧相ボディで！　ちなみに流石に擦れると痛いから服に直ってことはないですよ、ホックとかそういうアレじゃないだけで。

「何があったんですか……」

「ラプラスちゃんが可愛いってことはわかりましたよぉ」

『これです』

そう言って、俺は使っているタブレットを操作して、問題のページを見せつけた。そこにあるのは――ラプラス人形、そして、ラプラスブロマイド、他様々なラプラスグッズ。

「わぁ、すごい数のラプラス先輩……」

「はうっ――――」

――各種ラプラスグッズにときめいてしまったのか、ヒツミちゃんが胸元を押さえて倒れ込む。この光景、一昨日からなんど見かけたことだろう……

「ええと、どういうことですか？　これ、ラプラス先輩には知らされてなかったんです？」

『知らされてませんよ！　よく見てください！　そもそもこれは建前

上私ではないんです！』
「あっ、本当だこれ、ラプラスじゃなくてプラスってキャラクターだ……どこをどう見てもラプラス先輩ですけど」
「プラスちゃん――――はうっ!!」
――起き上がろうとしたヒツミちゃんがまた倒れた。
さて、ここらで一旦落ち着いてソラくんに状況を説明しよう。ヒツミちゃん？　奴はもう手遅れだ……
先日、白狐の社を訪れた俺は、白狐の社がラプラスグッズで溢れかえっている光景を目にした。基本的に賽銭箱を設置してもお金がもらえない白狐の社にはあまり足を運ばなかった俺だが、結果として社がこうなってることを今の今まで知らなかったのである。
ともあれ、そこで知った驚愕の事実、なんと巷では今、妖精系銀髪少女プラスちゃんが凄まじい人気でＳＮＳのトレンドを席巻しているのである。
これまた気付かなかった案件……だってラプラスはＳＮＳとかでレスバトルしないし……アニメやゲームを楽しむくらいで十分だし……
さて、そんな自分が気が付かなかった妖精少女プラスちゃんだが、元はとある一枚絵から始まったらしい。それがやたらＳＮＳでバズって、それはもうすごい社会現象になったそうだ。
今では各地でプラスちゃんグッズが作られ、中には薄い本まであるのだとか。この情報、ヒツミちゃんに教えたらヒツミちゃんは明日を迎えられないかもしれない。
「なんでこんなことに……」
「ラプラスちゃんは可愛いから当然ですよ！」
『そういうのはいいですから』
――冷たくあしらったら、ヒツミちゃんは更に幸せそうに笑みを浮かべた。こういうことすると楽しそうにするのは、色々と重症な気がするな。
『流石に、ここまで私に似ているのに、これが私ではないというのは無理があると思います』

「ということは、発端はうちの学校ですかね」
『それが一番可能性が高いかと』
――というか、因果というか因縁というか、不思議とこういうものはどこかで繋がるものなのだ。つまり、何がいいたいかと言えば、この絵は見覚えがある。
そして、その見覚えとは、すなわち彼女のものなのだ。彼女が誰か、という話なら非常にわかりやすい。
「……というか、この絵私見たことあります。美術部の……ヒトハちゃんじゃないですか？」
つまり、最後のヒロイン。
ヒツミちゃん、ミズキ、クロちゃん。そして――
御原ヒトハ。
四人のヒロインの中で唯一の一般人――だった――枠。彼女こそが、本来ならばゲームに置いて最初にソラくんに出会うヒロインであり――
最も普通な少女であった。

◇

御原ヒトハ、一般人の少女であるが、だからといって天剣妖牙になんの関係もないかと言えば、そんなことはない。ヒトハちゃんは一般の出ではあるが、特殊な才能に恵まれた少女だ。
美術の才能に優れた彼女は、この学校の唯一の美術部員である。この美術部、最終的に学校におけるソラくんたちの拠点になるのだが、この世界ではそもそもヒトハちゃんとソラくんに接点がないため、美術部は未だ彼女の城であった。
そんな彼女の性格はとにかく普通。このゲームにおいて天剣を知らない唯一の一般人であることもあって、プレイヤーと視点を同じくし、人に知られてはならない夜の世界を、彼女とともに知っていくことになるのだ。
そして、その唯一の欠点といいうか、特徴といってもいいのが、影

響されやすいということ。ヒトハちゃんが絵を書くのは姉の影響だ。ゲームにおいてとある事情から意識不明になってしまったヒトハちゃんのお姉さん、御原シイナの夢であった絵の仕事。それを受け継ぐように、今のヒトハちゃんは美術部員として頑張っていた。

と、いうのがヒトハちゃんの来歴なのだが――

「あああああああああラプラスお姉さまあああああああああ！んあああああああああああああああああああああああああああああああ!!」

今、俺達の目の前で、ヒトハちゃんは等身大のラプラスだきまくらを抱えてエキサイトしていた。気まずそうなソラくんの視線が痛い。いくら直視できないからって、こっちを見ないでいただきたい！

彼には帰ってもらったほうがいいかもしれない……が、とりあえず目の前の状況だ。

現在俺たちは事の次第を確かめるため、こうしてヒトハちゃんの本拠地に乗り込んだのだが――

彼女はエキサイトしていた。

繰り返す、彼女はエキサイトしていた。

ついでにいうと、彼女はエキサイトしていた。

これはひどい……

「んんんんんっ！」

――そして、ここにも一人、エキサイトしかけている人が居た。ヒツミちゃんがこっちを見ている。まずいまずい、とてもまずい！

なにせこの美術部部室、白狐の社よりやばいのだ。

具体的に言うと社はただのラプラス人形しかなかった。そこにあるスケベさも、精々人形のスカートの中身を覗き込む程度のスケベさ。痛いほど解るその気持ち、だけどこっちは解りたくない。

ここにあるラプラスのイラストの、平均布面積は三割がいいところだった。

変態である。
その中に埋もれてエキサイトしている変態がいた。
「ラプラスお姉さまーーーーーー！」
「ラプラスちゃーーーーーーーん！」
二人いた。
ここで増えるのか……
『ソラくんは帰ったほうがいいと思います』
「……いたたまれなさすぎるのでそうします」
ああ主人公、ああ主人公主人公……ソラくん、なんか俺といるときより、社務所で修羅場と格闘しているときのほうが楽しそうだ。
ジェラ……
なんで書類にジェラってるの？
さて――――
「――――」
御原ヒトハは、俺に気がついたようだった。そりゃまぁ、隣で胸を抑えて暴れているヒツミちゃんがいたら、こうもなるというものだけど。
「アノ」
そして気がついた。俺と目があった。
『なんでしょう』
その顔は、今にも死にそうだった。
というか、下手するとこのまま窓の向こうにダイブしていきそうなやつだった。
「コロシテクダサイ」
――ちょっと可愛そうだな、と思いつつ、どうしてこうなったのかと俺は天を仰ぐのだった。
〈〉

「私がやりました……」
　大量のラプラスグッズを何とか片付けて、最低限話をできる状況にして――というか、しないと窓の外に飛び出していきそうだったので――それを終わらせてから、キレイになった部室で、正座するヒトハちゃんの前で椅子に座っている僕とヒツミちゃん。
　ところでどうしてだきまくらはそのまま抱きしめてるんですか？
「最初は出来心だったんです……」
「わかります……」
『解らないでください』
　――曰く、ラプラスを知ったのは、姉のシイナを経由してのことだという。何を隠そう、このラプラスとヒトハちゃんの姉である御原シイナは中学時代の同級生である。色々あってシイナとは別の学校に進んだわけだが、妹のヒトハちゃんはラプラスと同じ学校を選んだわけだ。
　これはゲームの頃も同じである、ラプラスは人と同じように学校に通っている、これには色々とわけがあるのだが、まぁここでは割愛だ。
　そして案の定というわけか、シイナちゃんは今も元気に高校に通っているという。ここまでくると、運命の悪戯というやつに、俺はだいぶ慣れてきていた。
「姉の話を聞いて、この学校でラプラスお姉さまに出会って、私、思いました。私は、貴方に出会うために生まれてきたのだと」
『流石にそこまでいくと、行き過ぎじゃないですか？』
　ところで、どうしてまだ抱き枕に擦り着いているんですか？
「シイナ姉さんは言ったんです、貴方はラプラスお姉さまに出会うべきだと。そうすれば、きっと貴方の願いは叶うって」
　なんでさっきからそわそわこっちを見てくるんですか？
「気持ちは解りますよ、ヒトハさん。私も、ラプラスちゃんに出会って人生が変わったんです。自分でも、こんなに幸せでいいのかってくらいで……」
「そうだよね……そうだよねヒツミちゃん！　えへへ、私達、仲良くなれる気がするな」

「貴方はラプラスちゃんの素晴らしさを、世界に広めるという役割を果たしたのです。誇っていいことですよ」
「うん……！」
どうして二人はそんなに距離が近いんですか？
『あの、ふたりとも？』
そそそっと二人から距離をとりながら、立ち上がる。なんだかこのままだとまずい気がした。
「あ、いやえっと、ラプラスお姉さまに変なことはしません！　私、ラプラスお姉さまのことはちゃんとわかってるつもりです！　お姉さまはマンガやアニメが好きだけど、それを周囲と共有しないから、インターネットでお姉さまを広めても大丈夫とか！」
『逆に質がわるくないですか!?』
「邪眼ナイトメア、いいですよね！」
『好きですけど！』
「じゃが……？」
――邪眼ナイトメア。前世におけるホップでステップで飛び上がる感じの週刊少年雑誌に相当する、有名雑誌で連載中の人気漫画。
国民的少年漫画であり、連載からすでに二十年以上が経過しているものの、人気を誇る超大作マンガである。
案外こういうのを素直に好きと言えるオタクは貴重なので、俺はいいと思う。
それはそれとして、そういったことにとても疎いヒツミちゃんは、首をかしげていたが。
『ソラくんが知ってると思うので、後で聞いてみてはいかがでしょう』
「あはは……ソラくんとは未だにちょっと距離感がつかめなくて……」
と、話を振ってみるとそんな答えが帰ってきた。
ああうん、まぁ再会してまだ一週間も経ってないしね。ゲームでも、今の時期だとヒツミちゃんとソラくんの間には溝があった。
まだミズキとソラくんのほうが仲が良かったくらいだ。
『そういえば』

――と、そこで更に話題を切り替える。
ヒトハちゃんには、俺の件以外にも、一つだけ聞きたいことがあったのだ。
「なんでしょう、お姉さま」
『夢を見ていませんか？』
「夢……？」
『はい。なにもない暗闇のなかで、何かが自分の体を引きずり込む……そんな夢です』
「いえ……そんな夢はみてないですけど」
『では、シイナさんは？』
「そこまでは……姉さん、寮で一人暮らしですし……あ、この後聞いてみますね」
『ありがとうございます』
――夢、大事な要素だ。
一般人であるヒトハちゃんは、本来天剣のような術式を使うことはできない。だが、ゲームではある能力を使うことができる。
それは簡単に言うと、絵に書いたものを幻として生み出す能力だ。この幻、幻でありながら現実に影響を齎すことができる。
その効果は絵が精密であればあるほど強力になり、ヒトハちゃんの能力は、主にパーティの必殺技として運用されていた。
そんな能力が使えるようになったのは、ヒトハちゃんがそんな夢を見るようになってからだ。ゲームで言えば、本編開始初日のこと。あの改造妖牙に襲われたその日からである。
これが何を意味するか――ヒトハちゃんが使えるその術式の名は、〝シンキロウ〟。この術式を使用できる人間は、ある存在に限られた。
この世界、天剣の中に、数十年に一度〝人柱〟と呼ばれる役目の人間が生まれてくる。人柱は総じて幻にまつわる術式を本能的に行使できる。
ヒトハちゃんがシンキロウを操れるように。ヒツミちゃんの母親――巫剣チコは、〝カゲロウ〟の術式を操ることができた。

人柱は数十年に一度生まれるといった。巫剣チコが人柱になったのは今から十年ほど前のことだ。故に、ヒトハちゃんはイレギュラーな人柱である。

だが、現状はもっとイレギュラーな状況がそこにはあった。

ヒトハちゃんは人柱ではない。そして――――

今、幻覚術式カゲロウを使えるのはヒツミちゃんである。

楽しげに、しかしそれでいて時折苦しそうに胸を抑えるヒツミちゃん。

なぁ、ヒツミちゃん。君は言った。神宝イザナミは他者に執着した病める少女に適合する、と。

であればもし――君が幸せを覚えたら、君は果たして病んでいると言えるのか？

今、俺の目の前ではヒツミちゃんが楽しげに、胸元を押さえながらヒトハちゃんと話をしている。

なぁ、その行動の意味は、

はたして、自然とそうしているだけなのか？

俺は、故に。

ヒツミちゃんが執着したのが、ラプラスであるからこそ、

その執着に、ケリを付けなくてはならないと、そう思うのだった。

そのじゅうに

――巫剣家は古くから続く人柱の家系だ。

巫剣が治めるこの土地には、神宝イザナミが眠っており、数十年に一度、これを鎮めるための人柱が必要になる。それは巫剣の女性でなくてはならず、巫剣チコも、その一人だ。

ゲームにおいて、回想では優しい女性として描かれる巫剣チコ、娘であるヒツミちゃんにとっても、良い母親であったようだ。

そういった思い出しかない――とも言えるが。

そして、巫剣チコは生まれながらにして人柱の役割を押し付けられた存在だ。そもそも、巫剣という家自体が、〝巫剣〟という役割に縛られた家柄だ。

巫剣テンホウは、生まれながらにして巫剣チコの許嫁であることを決められていた。両者は幼い頃から仲がよく、それを否定する理由は何一つなかったが、しかし二人にはそれしかなかったのだ。

巫剣ヒツミが、天影ソラと幼馴染でいられたような、不凍義ミズキと幼馴染という関係を築けたような、そんな自由もなかったのだ。

――とはいえそれも、天影ソラの追放という形で終わりを告げるが。

それよりもひどかったのが、当時の巫剣であり、それを少しでも変えようとしたのが巫剣テンホウだ。ヒツミちゃんがソラくんと一時的でも関係を築けたのも、ヒツミちゃんに当主であっても、日常という自由が許されているのも、テンホウがそうなるように動いたからである。

――チコとテンホウの時代、学校にも通うことができなかったというのだから、テンホウの行動は偉大だ。

加えて言えば、ヒツミちゃんはそんなテンホウとチコの存在を、常に見ながら育ってきたのである。ヒツミちゃんは、チコが人柱となるその日のことを、覚えている。

ヒラサカを通って、イザナミの元へと消えていく姿を、覚えている。

その前日の夜、ヒツミはチコにすがって泣くテンホウの姿を見た。

それを泣きながら抱きしめるチコの姿を見た。

そして、それでもチコは人柱となった。

その時から、巫剣ヒツミという少女の人生は、ある一つの事実が刻まれたのだ。

人は、己の役割に従って生きなくてはならない。どれだけそれが望まざるものであったとしても、役割から逃げることはできないのだ、と。

どれだけ人が自由であろうと、その自由は役割に従った結果の自由だ。画家を志すものが、大成せず失意のまま亡くなったとして、それはそれがその人物の役割であり、役割とは、生まれた時から決まっているのだ。

才能、と言い替えても良い。

天影ソラも、またその典型である。天剣としての才能を一切持たず、天剣補佐である社務所の人間であれば誰もが欲しがる才能をもちながら、天剣を追われ普通の学生として生活する役割を、彼は定められていた。

ヒツミには当主としての才能があり、誰もがヒツミのことを次期当主として扱った。だからヒツミは当主という役割に縛られている。誰が望もうが、自分が望まなかろうが。

巫剣ヒツミは、巫剣ヒツミにしかなれないのだ。

そんな少女が、ラプラスの悪魔という存在を知ったらどう思うだろう。彼女の行動を傍目から見たら、どう思うだろう。

――正直、俺がゲームと同じくラプラスの悪魔であろうとするのは、俺がラプラスではないからだ。ラプラスではないのに、ラプラスとして生まれ、生きることを定められたからだ。

これが俺の知らない誰かであれば、それこそ、ヒロインでもなんでもない少女に転生していたら、俺はそのことを困惑と歓迎でもって、

受け入れるだろう。
一度は死んだ命なのだから、もう一度のチャンスが与えられる幸運は、素直に喜ぶべきことなのだから。
それでも、俺はラプラスだった。
ラプラスとして生まれ、そしてラプラスとして生きることを決めた。俺はヒツミちゃんの思うラプラスとは違うけれど、ヒツミちゃんと思うラプラスと同じことはしていると思う。
だってそうしなければ、本来ラプラスとして生きるはずだった〝彼女〟に申し訳が立たない。いるはずだった〝彼女〟を押しのけるということは――

彼女の存在を否定していることにほかならないのだから。

そのことに後悔はないけれど――一応、俺は今の生活をそこそこ満喫しているけれど――それでも俺のこの生き方は、ヒツミちゃんにとっては、自分と同じだと映るはずなのだ。
なによりヒツミちゃんは、自由に生きて、空を求めたラプラスを知った。隠しルートのラプラスは生きているのだ。本編では、人間性が育たず、人とは違う異質な存在の域をでなかったラプラスが、けれども人と同じように、人を愛して、自由を愛しているのだ。
人は役割を定められて生まれてくるが、それでも、その役割の中で自由を選択する権利はある。
ラプラスの悪魔は、ラプラスの悪魔ではある。だが――

彼女が笑ってはいけないと、誰かがそれを束縛したことはないのだから。

かくして、自分と同じ存在。自分と同じ自由を持たない少女であるラプラスに執着したヒツミちゃんは、イザナミを身に纏うことを決めた。
そしてヒツミちゃんたちを苦しめていた巫剣の利権に群がる者た

ちをヒツミちゃんは追い出し――その結果、ソラくんが何ら問題なく社務所に戻ってこれるまでに、巫剣家を変えることができた。
それは、自由を手に入れたといえるのだろう。
天影ソラが、社務所の一族が。
もちろん、不凍義ミズキの件だってそうだ。彼女がいくら妖牙に完全覚醒し、半妖という危険な存在でなくなったとしても、それを天剣が受け入れるかは別問題だ。本来なら、天剣を追われ、穏当に行っても妖牙――白狐の社に所属することとなるだろう。
下手をすれば、完全覚醒を疑われて処刑という流れすらあり得た。
それを、しかし巫剣の人間は一切気にした様子はなく、ミズキが完全覚醒したことを流していた。それはどうだろう、ミズキちゃんが受け入れられているという証左であり、これもまたヒツミちゃんが手に入れた自由の一つだった。
しかし。
ああ、だとしても――
それが巫剣ヒツミの自由と何の関係がある？

力を手にし、権力を手中に収めたヒツミちゃんは、結果として自分の役割を果たしているに過ぎない。ヒツミちゃんの自由とは、つまり。
自分では手にすることのできない自由なのだ。
ゲームであれば、それはソラくんによってもたらされた。彼が巫剣を、そして天剣そのものを変革する礎となり、ヒツミちゃんのルートでは、やがてヒツミちゃんに自由を与えた。
彼女を解き放ったのだ。
しかし、この世界ではそうは行かない。ゲームよりも更に自由を失ったヒツミちゃんは、ソラくんでも手の届かないところへと行ってしまう。
物理的に時間が足りないのだ。ヒツミちゃんが自由を全て奪い取られるその時に、もしも最短でソラくんが強くなったとしても、そい

つを鎮めることはできないのだから。
では、俺は――ラプラスはどうだ？
今、ヒツミちゃんはラプラスに執着している。そのことは、ヒツミちゃんの自由で持って行われていることではないのか？
まったくもって違う。ヒツミちゃんの執着は本物だ、しかしそれを突き動かしているのはイザナミの影響だ。もしもイザナミの影響がなければ、ヒツミちゃんはもっと普通に、俺と仲良くなってくれたはずなのだ。
そして、これもまたヒツミちゃんが言う通りなのだろう。
彼女は言った、「ラプラスには幸せになってもらう」。そのための行動が、これなのだ。イザナミによって、歪んでしまってはいるけれど。
だから、ああ、つまり――

御剣ヒツミは、自分の自由と引き換えに、周囲の自由を解放しようとしている。

そして解放した後――

自由を奪われた自分は、役割の中に消えようとしているのだ。

◇

――意識が引き戻される。
いや、そもそも引き戻される……とは？
そもそも俺はさっきまで何をしていたのだっけ。周囲は真っ暗、何も見えない。いや、ほんのりとそこが地下の世界であることは解る。地面は固く、壁はごつごつとしていて刺々しい。
ああそうだ、思い出した。
ここはヒラサカの中だ。俺はここに用があってやってきたのだ。
神宝イザナミが眠っていた黄泉への道。巫剣が管理する神の土地とも言うべき神聖で――しかし神聖とは程遠い闇と腐敗に満ちた世

界。
死者の国とは、かくも寂しいものなのか。
――ここに来ると、神というものが単なる存在でしかないと俺は感じる。元の世界には神の存在を肌で感じられることはなかったから、その神秘性を保っていられた。けれども、この世界には神がいる。神が理不尽を強いてくる。
そんな世界で、果たして神がどれほど特別に思えるだろう。
少なくとも、俺にとって神宝イザナミも、神宝ムラクモも、そしてこの地に眠る神と呼ぶべき存在も、どれもが等しくただのモノにしか見えなかった。
俺が欲しいのは、もっと暖かくて優しいもの、思いやりに満ちたものだ。威厳があっても良い、威圧し、従えても良い。だが、そこに意思の理屈を添えて欲しい。
嫌いなら嫌いと言っても良い。好きなら好きをためらわなくても良い。
だから俺は――
――この、暖かくて柔らかいものが……うん？
思考にノイズ。そもそも嫌いとか好きとか何の話だ。関係あるようで、なにか変な哲学をこねくり回しているような意味の無さを感じる。
というか、もっと別の所に原因があるような……
うーむと考えながら、俺はそっと立ち上がろうとした。いつまでも横になっているわけには行かないからだ。
触れたそれは、柔らかかった。
……うん？　いやいや、このヒラサカにそんなものあるはずは――
――
下を見た。
「ん、ぅ――」
人が居た。

触っていたのは、胸だった。

ヒツミちゃんのはちきれんばかりの母性を、俺は掴んでいた。

――――

「あ、ラプラスちゃん――」

そして起きた。

まずい、と思う暇もなく、ヒツミちゃんはぐいっと俺を引き寄せる。

あっ、これはやばい――――

「――――私達、二人っきりですね♥」

――――――ッッッッッッッ!!

声にならない悲鳴が、ヒラサカの中に響き渡った。

そのじゅうさん

――――ヒツミちゃんの件は、思い切り変わってしまった四人のヒロインたちのなかでも、一番最初に解決するべき問題だった。

なにせ、他とは違って時間制限があるのだ。ヒツミちゃんがイザナミを纏った時から、彼女はある目的のためにイザナミを身にまとったのだろうということは理解できていた。

その上で、それが実際に正しいかどうかは、実際に期限になるまで判別がつかなかったけれど――どっちにせよ、今の状況でこのイベントを済ませないのはまずいので、あまり関係はなかった。

さて、数日前に白狐の社に赴き、時系列的には全てのヒロインとの顔合わせを済ませた後。ここからしばらくは日常イベントが続く。

ルート決めのための各種イベントと、大事な日常の積み重ねだ。ゲーム内容以外の事を言うと、この日常イベントまでが体験版範囲、そして、体験版の終わりが今日だ。

この日に何があるかといえば、なにもない。ゲーム本編では、変わらず日常が流れていくだけだ。

だが、それは黒幕が目的を達成したためでもある。どういうことかというと、黒幕はある目的のために人柱が必要なのだ。そして、ヒトハちゃんという人柱を見つける。

黒幕にはとある事情から時間がない、そのためこれを解決するために、人柱を用いての儀式が必要になるのだ。

故にヒトハちゃんを発見すればその捕獲のために準備を始めるが、見つけられなかった場合、黒幕は凶行に及ぶ。具体的にどうしたかというと、

ヒツミちゃんを人柱にしたのだ。

人柱巫剣チコの娘であり、人柱一族巫剣家の直系、先代のチコが人柱であったことから、可能性は低いが、しかし低くともゼロではない。だからこそ多少無理をしてでもヒツミちゃんを人柱とする。

これが黒幕のラプラスルートで起こした行動だった。
なにせラプラスルートは本編が始まらない、ヒトハちゃんが人柱であることに気がつくことが、黒幕には不可能だったのだ。
だから、焦った黒幕はヒツミちゃんを代替とした。強引に彼女を人柱として――――

結果、世界が滅びた。

これがラプラスルートにおける、世界崩壊の原因であり、ラプラスとだけ仲良くなったソラくんが、結果として世界を滅ぼしてしまう要因だ。
まぁ、流石に知らなかったというのを責めるのは酷というものだし、世界にたった二人、ラプラスとともに残されてしまうというのは、ソラくんはあまりにも深い業を背負わされてしまうのだが。
ともかく、この場合の問題は、この世界においてもヒトハちゃんの存在が黒幕に知られていないということ。
というよりも、そもそもヒトハちゃんが人柱ではないということ。
夢、というのがキーワードだ。俺がこの間ヒトハちゃんに聞いた夢、というワードはそれが理由。夢を見ているかいないかで、人柱かどうかは判断できる。
そして、ヒトハちゃんはこれにひっかからなかった。ということは、つまり。

今、世界に人柱は存在しない。

黒幕にとって、これは非常に由々しき事態だ。そして、これを回避するための方法が、神宝イザナミとヒツミちゃんである。
ゲームでは取れなかった手段だ。ゲームのヒツミちゃんはイザナミに対する適性を有さないのだから。
具体的にどうするか――は、今更語るまでもないだろう。
神宝イザナミと適合した少女には、強制的に人柱としての適性が付

与される。これを使えば、ヒツミちゃんを人柱にすることが可能なのだ。
だから、俺のするべきことはそれの阻止。この世界に来て、ぐだぐだになってしまった俺のプランだが、それでもやれることはある。
――今日、この日、世界が崩壊することを防ぐため、
俺は、ヒラサカを潜るのだ。
――が、しかし。

「――――だめぇぇぇぇぇぇぇ！」

意気込んでヒラサカの前に立っていた俺の後ろから、声がして。
直後、それがヒツミちゃんだと気付くより早く――
俺たちは、勢いよくヒラサカへと落ちていったのだ。

◇

――そして、死地を乗り越え、俺とヒツミちゃんは距離をとって話をしていた。
「……そういうことだったんですね」
〝肯定〟
ジリジリ、にじり寄ろうとするヒツミちゃんから後退する。なんとかヒツミちゃんから遠ざかろうとしているのだが、どうしてか一進一退にならない。少しずつ距離を詰められている。向こうの足さばきがうまいからだろうか。
「そういうことでしたら、私も同じ目的です。えへへ、仲良しですね♥」
――距離をとっているため、筆談が難しかったが、それでも天剣として人並み外れた視力を有するヒツミちゃんがなんとかしてくれた。
結果、俺はヒラサカにゴーイング自殺を決めようとしていたのではなく、ヒラサカで起きている問題を解決しようとしているということ

を、ヒツミちゃんは理解してくれた。
しかし、同じ目的？
……まぁ、今は指摘しないようにしよう。
話がこれ以上長くなってもしょうがないからな。
なんて、意識を逸してしまったからだろうか、
「もう、水臭いんですから♥」
――一瞬で距離を詰められた。
〝――!!!!!!〟
驚愕、焦りとともに距離を取る。
あぶないあぶないあぶない。
「冗談ですよぉ」
〝虚実!!〟
今、距離を取らなかったら殺るという意思を如実に感じた。まちがいなく、ヒツミちゃんは俺を捕食するつもりだった!!
息を荒げながら、唸る。これ以上彼女と近くにいると、いろいろな物がやばい。ただでさえ今はえっちオブえっち形態なのだから、心の中の俺が悲鳴を上げてしまう。
あれ？　俺って普通に自意識は元男じゃない？　ラプラスで女の子するのって、女の子アバターのゲームみたいな感覚だったはずなんだけど。
俺ってラプラスだったっけ？　俺って誰だっけ？
じゃない！　今そんな雌落ち議論はしなくていいんだよ、隙を晒したら終わりだ！　そもそも人生の三分の一以上をラプラスとして過ごしている俺が、今更〝俺〟という一人称以外に男要素があるのかっていうのは普通になんとも言えないしな！
「んふふ、ラプラスちゃんは百面相が可愛いですね」
〝否定（していない）〟
表情は動いていない。
感情は豊かだが、ラプラスの表情は動かないのだ。
「えぇー、動くよぉ」
いや、ヒツミちゃんはその感情を見ているのだろうが。まぁそれだ

けこちらをよく観察しているということだろう。
まぁ、それを悪い気がするかといえば、そんなにしない。
節度が、節度がほしいのだ。
「とにかく、これからラプラスちゃんは――ヒラサカ様のところに向かうんですよね」
話をマジメな方向にヒツミちゃんが切り替える。
ヒラサカ様、巫剣家が守護する神の名だ。神はイザナミではなく、この黄泉という土地そのものなのである、イザナミは、あくまでその土地に根付く死者でしかない。
つまるところ――
「じゃあ、一緒に行こう！」
少し反芻していたところに、突然ヒツミちゃんが襲いかかってきた！　何故このタイミングで？　と思いつつ即座に避ける。残念、警戒は怠っていない。
〝無駄〟
「んー！　そっけないラプラスちゃんもいいよぉ」
いつもどおりの光景だった。
さて、ここからは少し打ち合わせが必要だ、俺は警戒を最大限にしつつもヒツミちゃんに近寄る。筆談をきちんとおこないたいのである。
「えっ、そんな急に……困るよラプラスちゃん」
『そうですね、きちんと相談しておかないと、この先が困ります』
「相談？　なんのこと？」
『この先は危険ですから、命に関わるんですよ？』
俺たちがこれからすることは、ラストダンジョンにオープニング終了直後に突入することだ。幸い、強くてニューゲームによって戦力は整っているが、それでも危ういところはある。
「なんでですか？」
――が、残念ながらヒツミちゃんにはそれが伝わらないのである。
『ヒツミさんはお忘れかもしれませんが、このヒラサカって危険な場所なんですよ』

「……あ、そっか」
まぁ、致し方ない話。
そもそもヒツミにとって、このヒラサカは儀式の場である、人柱としての儀式だけではない、ここでは別世界の可能性を覗くことができる。
幼い頃から、何度かヒラサカに通っているのだ。そして、その間ヒツミちゃんに何ら影響はなかった。
しかし、本来は違う。黄泉というのは危険な場所だ。言ってしまえば文字通りの死地なのだから、下手をすると帰っては来れない。振り返ってしまったから帰ってこれないのではなく、普通に殺されて帰ってこれないのだ。
『ヒラサカは、巫剣の人間以外が足を踏み入れた場合、防衛機能が働きます』
「巫剣が一緒にいても、だめなんですよね」
『そのはずです』
――ゲームにおいて、このヒラサカをソラくんが通ることが一度だけある。グランドルートにおいて、あるものをここに取りに来たからだ。
そして、その際ソラくんは激戦に巻き込まれる。
『私とヒツミさんでも、下手をすると負けるかもしれない相手なんです』
「――雷神八鬼、だよね」
『はい』
黄泉の国に住まうと言われる、八体の雷を操る鬼。
このヒラサカにもそれを模した防衛機能が存在しており、これを雷神八鬼とこの辺りの人間は呼称している。俺と今のヒツミちゃんで行っても勝てるかわからない相手。
故にこそ、このヒラサカは霊地、神の住まう場所として存在できたのだ。
「大丈夫ですよ！」
しかし、ヒツミちゃんは楽観的だ。

勝てると思っているから、――という様子ではない、これはきっと。

「ラプラスちゃんがいますから！　私は無敵です！」

万能感。

というべきだろうか。

――神宝イザナミを手に入れて、神とすら言える力を手に入れて、ヒツミちゃんはその影響下にある。どれだけ彼女が力に酔っていなくとも、驕らず戦うことができたとしても。

こればかりは、どうしようもないものだ。

……いや、原因は俺の方か。

愛は強し、って言うからな。

ああ、だから――

『だから胸をなすりつけるのはやめてください！』

――いつの間にか、背後を取られていた自分の不覚を嘆きつつ、俺はこれからの戦闘に思いを馳せるのだった。

そのじゅうよん

雷神八鬼、名前の通り雷を纏った鬼。ただしその姿は腐れ爛れ落ちたゾンビのようであり、名前から感じられるかっこよさのようなものは一切ない、単なるモンスターである。

そもそも親玉であるところのイザナミからして、腐った体を夫に見られたくなくて発狂した経緯があるので、まぁだいたいそんなものである。

こいつらの厄介な点は、一言でいうと――

「せいっ！」

――戦闘が開始し、数分がたった。

ヒツミちゃんが迫ってくる雷神八鬼を吹き飛ばす。大きく吹き飛んだそれを覆い隠すように、二体の雷神が襲いかかり、ヒツミちゃんは隕石を放ちながら後退した。

「ああ、また！」

〝追撃〟

そこに俺が動く、ヒツミちゃんに群がる二体の上を飛び越えながら、一気に吹き飛んだ雷神へケリを叩き込むのだ。が、しかし――そこには二対の雷神が待ち構えていた。

……どっちだ!?

とはいえ、そこは構わず追撃、地面をめり込ませ、正面から攻撃を受け止める二体と張り合う。一瞬の拮抗の後、遠くから飛んできた流星が二体をまとめて薙ぎ払った。

そして、俺はそのまま着地、地面を叩き割って足元を空白に変えながら、薙ぎ払われた二体に拳を叩き込んだ。

一体は躱されたが、もう一体は大きく吹き飛び、地を転がった。――そこに、別の雷神が覆いかぶさる。

「ああもう！　またどれがどれだか解らなくなりました！」

ヒツミちゃんが叫ぶ。

先程から、ずっとこうだ。理由は単純、この雷神、見分けがつかないのである。八体もいて、容姿が何から何まで瓜二つ。

そのため、激しい戦闘の中、どれをどれだけ攻撃したかわからなくなる。
向こうもそれがわかっているから、攻撃を受けた雷神を庇うように別の雷神が集まり、攻撃を仕掛けてくるのだ。そして――
〝追撃！〟
「わかってます。放っておくと回復するんですよね！　ああもう、なんでこんな！」
いいたくなることは解るが、ヒツミちゃんには手を動かしてもらわないと困る。俺はそもそも口を動かせないから問題ないが、とにかく必要なのは手数で押し切ることだ。
――実は昔、ここに一時期通い詰めていたことがある。雷神はこの特性から倒しにくく、またスペックも普通の妖牙よりも高いため、戦闘経験を積むのも簡単だったのだ。
駆け回る、地を叩き壊し、足場を奪い、自分は足場を作って、時には足場をすり抜けて攻撃する。まったくもって嫌な戦い方だ。
これを編み出したのも、この雷神たちをサンドバッグにした成果である。
「とにかく、行きますよ！　あっ、ラプラスちゃんかわいい！」
〝集中！〟
「わかってます♥」
ふっとばした雷神よりも素早く後ろに回り込み、雷神を更に蹴り飛ばす。地に叩き伏せながら地面をかち割り、宙に浮いたところを更に拳で叩いた。
が、そこで別の雷神が割って入る、カバーに入られると分が悪い、俺は後方に退きながら別の雷神に蹴りかかる。割って入った雷神は、ヒツミちゃんが隕石で足止めしていた。
――かつてサンドバッグにしていたが、それは同時に一人では倒しきれなかったということだ。実際、決定打に欠ける俺だけでは、この鬼たちは倒せない。
一応、本気で倒そうと思ったこともあるのだ、倒しておけば後が楽だから。しかし、それができなかったから、こうしてヒツミちゃんと

二人で戦っているわけである。
一人で来ようとしていなかったか？　今日をどうにかできれば、とりあえずは問題ないので、ヒツミちゃんが来なければ、それはそれで問題はないのだ。
来てしまった以上、俺はヒツミちゃんの問題にケリをつけるほかなくなったわけだが。
「――ラプラスちゃん、大きいの行きます！」
〝承知〟
そして、俺ができるだけ雷神を一箇所にまとめると、ヒツミちゃんがそこへ向けて隕石を放つ。巨大に固めた隕石、この場においてもっとも範囲的な決定力を持つ一撃だ。
即座に飛びきつつ、地面を吹き飛ばして足場を奪えば、後は雷神を一網打尽というわけである。
が、しかし――
「雷神を足場に雷神が!?」
ヒツミちゃんが叫ぶ、一部の雷神が、雷神を足場に飛び退いたのだ。
更に、足場になった雷神のうち一体が残りを後ろに回し、耐える。
直撃――だが、倒しきれていないのは明白だった。
〝残念（おしい）〟
「このまま……続けます」
――爆発の後には、雷神が一体減っていた。つまり、盾にした一体が残りを守ったのだ。ともあれ、これで七体。こちらはまだまだ十分に余裕がある。
一体を倒せると解れば、優位がどちらに傾いているかは明白だ。
そのまま戦闘は推移する。激しく飛び回りながら地面をめちゃくちゃにして、時には壁や天井すら崩落させて雷神に攻撃を仕掛け、奴らを追い込んでいく。
ヒツミちゃんはといえば、基本的に位置を保ちつつ、隕石で攻撃。迫ってきた雷神は錫杖で打ち払っている。
この戦い方は、相談の上で決めたことだ。
天地の上下しかわからないような、この殺風景な洞窟で、敵の位置

関係を把握することは非常に難しい、入り口と出口は一つずつあるのだが、どっちがどっちであるかは正直よくわからない。激しく飛び回る戦闘を繰り広げるのだから当然だ。

だから、ヒツミちゃんが目印となる。ヒツミちゃんが動かないことで、空間の位置関係は明白になり、多少は雷神の見分けがつくだろうという算段だ。

あまり近接戦闘を重視しないヒツミちゃんの戦い方は、こういうところで俺との相性が良かった。

〝破壊〟

「解りました！」

そして、もう一つ。俺が合図をすると、ヒツミちゃんは浮き上がる。これもまた相談の上で決めた合図。俺が会話をできない関係上、連携を言葉で補うのは不可能だ。

共闘の経験もなく、下手をするとお互いに攻撃がぶつかりかねない。

対策としては、まず俺がヒツミちゃんから距離を取ること。ヒツミちゃんが俺なら自動ですり抜けてしまう攻撃を放つこと。こうすることで徒手空拳以外の攻撃手段を持たない俺はヒツミちゃんを攻撃することなく、ヒツミちゃんの隕石が俺に流れ弾となることはない。

更には、ある程度作戦を事前に決めておくこと。そして、その合図を決めておくこと。

今回であれば、〝破壊〟というのが俺からの合図。これが何を意味するか――

俺は、勢いよく足を振り上げ。

それを叩きつけ、地面を叩き割った。

当然、浮遊しているヒツミちゃんには無影響だ。

俺は、雷神たちが宙に放り出された中を、破壊された地面を伝って駆ける。この移動、さんざんコイツラあいてに練習しただけあって、

かなりスタイリッシュに決まっているといえるだろう。
決定打がなくてグダりやすい俺の戦闘で唯一の加点ポイントだった。
「もう一度行きます。合わせましょう、ラプラスちゃん！」
〝了解〟
うなずき、隕石を生み出すヒツミちゃんに届けるように、膝蹴りを二体の雷神へ突き刺し、そのまま突進する。流石にこれ以上はまとめきれなかったが、二体もまとめられれば十分だ。
そして、ヒツミちゃんの流星がこちらへ迫る。このまま行けば、俺も激突するだろう、しかし、俺はそこで自分だけ攻撃の可能性を否定する。
というか、俺の能力ではそもそも、基本的に生物の可能性は否定できない。
結果――
雷神だけが隕石に飲み込まれ、消失した。
俺は隕石をすり抜け、着地。ポッカリとクレーターのようになった地面、雷神達はそこに這いつくばりながら、こちらを見ている。これで残るは五体。
「うふふ、うふふふふ、私達、本当に息ピッタリですねぇ。お互いの相性抜群って感じです！」
〝同意〟
「体の相性も確かめませんか？」
〝拒否！〟
いきなり何を言い出すんだはしたない。
それはさておき、ここまでの戦闘で解ること、本当に俺とヒツミちゃんは相性がいいのだ。ヒツミちゃんは飛べるから、一切俺の戦法で影響を受けることはない、遠距離攻撃主体であることも、また同様。
ヒツミちゃんは遠距離から一方的な砲撃を得意とするが、俺はその砲撃に巻き込まれないから一切砲撃に遠慮がいらない。これは、正直なところやってみて初めて実感するシナジーというやつだ。
ゲームでは、ヒツミちゃんが単体でラプラスと共闘する場面がない

し、ラプラスはそもそもこんな大雑把な戦い方をしない。
格闘センスに優れたゲームのラプラスは、もっと静かな戦い方をするのだ。
――起き上がってきた雷神を、俺たちは蹂躙する。
雷神はスペックが高い、常に雷を纏っているから接近すると感電する恐れがあり、その状態で数体に囲まれると、一気に不利になる。
体術にも優れ、スペックがもう少し高ければ、俺は一方的にやられていただろう。今も数体で俺を囲み、巧みにフェイントをしかけてくる。正直、俺がまともにそれとやりあっていたら引っかかってしまうだろう。が、しかし俺はそれをまるごと全部薙ぎ払うことで防いだ。
雷神の見分けがつかない上に、連携の練度が高く、たとえ同数でもこちらが数の有利を取りにくいため、下手に手間取っていると回復されてしまうという特性。
逆に向こうは数で囲んでくることから、その厄介さは言うまでもない。が、しかし――
――この程度乗り越えられないようでは、俺はラプラスとしての格を保てないだろう。
なにせ、ゲームではこいつらを、イザナミをまとわないヒツミちゃんと、ソラくんだけで攻略したのだから。
まぁ、グランドルート中盤ということもあって、両者の強さは個別ルート終盤に勝るとも劣らないほどにはなっていたのだが。
それでも、スペックで言えば明らかに俺たちのほうが上である。
だからこそ、俺は地面に雷神の一体を叩きつけ、ヒツミちゃんがそれを穿った。
これで、残り四体。
〝注意〟
ヒツミちゃんに呼びかける。
「わかっています」
――そして、ヒツミちゃんもまた、応じて警戒を強める。

雷神八鬼。
数の多い敵というのは、言ってしまえば強いのは最初だけだ。一体でも倒してしまえば、倒せてしまえば、後は勝つのは容易である。
これが千、万の大群であれば、また一つの絵になるだろうが、八という微妙な数では、途中からは蹂躙戦に移行せざるを得ない。
だから、
当然のように雷神には奥の手がある。
俺たちが警戒した直後、

俺たちが倒した雷神のあとから、猛烈な雷が発生した。

ここからが本番だ。
当然ながら、先程の八体よりも、こいつらは強い。
発生した雷は残る四体の元へそれぞれ向かい、直撃する。
纏った雷が強さを増して、やつらのスペックを一段上に引き上げるのだ。
さて――気合を入れ直そうか、といったところで。

「あの、ちょっと気になるのですが」

ふと、ヒツミちゃんがポツリといった。
「……先程から、随分と彼らはラプラスちゃんを睨んでいるようですが」
〝当然〟
うん、まぁそれも当然。
先程から俺はすごい殺意でもって雷神に睨まれていた。
いや、まぁ――
――千回単位で道場扱いされて通い詰められたら、そういう風になるよね。

少しだけ申し訳ないと思いながらも、長い長い因縁に決着を突けるべく、俺は意識を切り替えた。